

広大科研

19

15520257

0100451706

概念構造における空範疇に関する研究

研究課題番号 15520257

平成15年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(C))
研究成果報告書

平成19年3月

研究代表者 井上 和子

(広島大学総合科学部言語文化研究講座)

教授

広島大学図書

0100451706



<はしがき>

本研究報告書は、概念構造における二つの空範疇の存在を、英語音声放出動詞、*TO*-不定詞補文構造、中間構文において検証するとともに、統語的空範疇とのかかわりを考察している。

研究組織

研究代表者 : 井上 和子 (広島大学総合科学部教授)

交付決定額 (配分額)

(金額単位: 千円)

	直接経費	間接経費	合計
平成15年度	800	0	800
平成16年度	600	0	600
平成17年度	500	0	500
総計	1900	0	1900

研究発表

(1) 学会誌等

Inoue, Kazuko (2004) "An Exploration into Action: The Case of English

Sound Emission Verbs," *Studies in Language and Culture* 30, 57-81.

井上 和子 (2005) 「意味表示と義務的コントロール」 『言語文化研究』(広島大学総合科学部紀要 V) 31, 1-18.

(2) 口頭発表

井上 和子 「中間構文の意味論と統語論の結びつきについて」 広島言語談話会 2006年12月9日

広島大学図書

0100451706



概念構造における空範疇に関する研究

研究課題番号 15520257

平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究費C）研究成果報告書

研究代表者 井上 和子

（広島大学総合科学部言語文化研究講座）

目次

序章	2頁
第2章：理論的前提	6頁
第3章：英語の音声放出動詞と空範疇	15頁
第4章：義務的コントロールとTO-不定詞補文	31頁
第5章：随意的コントロールと中間構文	42頁
第6章：結論	60頁
注	64頁
参考文献	69頁

序 章

Pinker (1989), Levin & Rappaport Hovav (1995), Kageyama (1996) 等に代表される概念構造意味論 (Conceptual Semantics) においては、語彙概念構造表示を構成する関数構造の項には、変項 (variable) と 定項 (constant) の二種類があるとされてきた。たとえば、Rappaport Hovav and Levin (1998) においては、動詞 *break* は、以下のように表示されている：

(1) [[x ACT <MANNER>] CAUSE [BECOME [y <BROKEN>]]]

(1) においては、x, y が変項であり、BROKEN が定項にあたる。前者は特定の名詞に限定されない表現であり、x, y の位置には、様々な名詞句が生じることができる。それに対して、後者は動詞がその固有の意味特性として指定している項である。

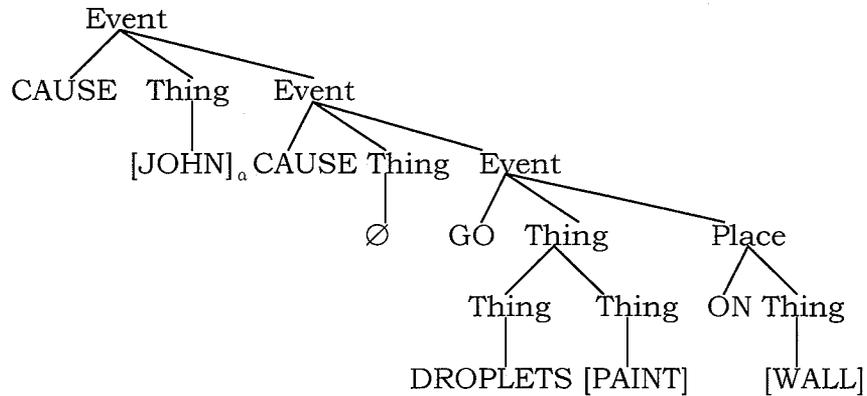
しかしながら、Inoue (2001a, 2001b, 2004) においては、この二者のほかにも、空範疇(empty category) も項として必要であるとの主張を行なっている。この空範疇には二種類あり、一つは先行詞と照応関係にあるものであり、もう一つは特定のものを指さない任意指示の空範疇である。前者は α , β , γ ... で、後者は \emptyset で、それぞれ表記される。それぞれ、統語論における義務的コントロール (PRO_{obl}) と随意的コントロール (PRO_{arb}) に相当する空範疇であると推定される。

本格的な議論にはいる前に、概念構造における空範疇の有用性を、一つの例で示してみたい。他動詞 *spray* は (2) に見られるように、場所格交替 (Locative Alternation) を許す動詞である：

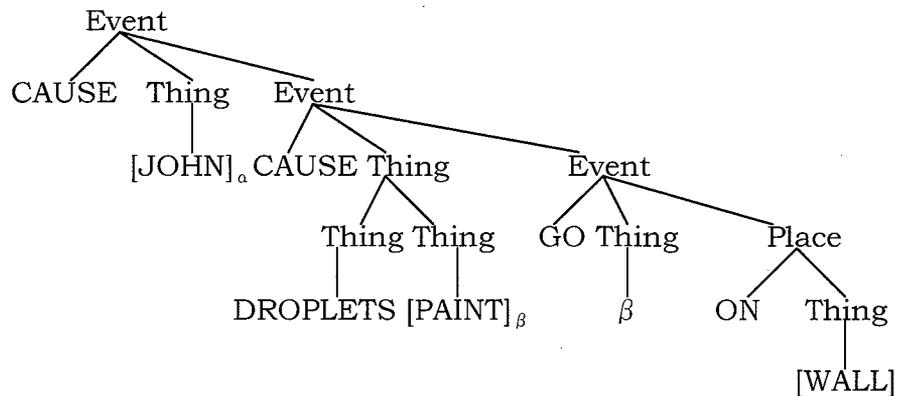
- (2) a. John sprayed paint on the wall. (locative variant)
b. John sprayed the wall with paint. (*with* variant)

それぞれの文は、概念構造表示では (3a), (3b) のように表わされる：

(3) a.



b.



特に注目すべきは、(3b) の *with variant* の構造における [PAINT] によって束縛されている β である。この binder-bindee の複合体により、同一要素の繰り返しを免れるばかりでなく、同一項が Instrument と Theme の二重の役割を果たしていることを示すことができる。これにより、*with variant* の locative variant とは異なる様々な振る舞いを説明できる。以下その主なものを挙げてみよう。その一つは、Instrument と同様に、動詞 *use* を用いた疑問文の答えとなりうることである：

(4) Which paint did Bill use to spray the wall?

He spray the wall with blue paint.

また, *how* を使った疑問文の答えともなりうる :

(5) How did he spray the wall?

With blue paint.

さらに, locative variant が使役交替を許すのに対して, *with variant* では許さないことも説明可能となる :

(6) a. Paint sprayed on the wall.

b. *The wall sprayed with paint.

これらの空範疇に関して, 取り上げる主たる問題は次の3点である :

(i) 語彙項目の形成にこの二つの空範疇がどのように関与しているか。

(ii) α , β , γ … の空範疇が統語構造にどのように結びつき PRO_{obl} とどのような関係にあるのか。

(iii) \emptyset が統語構造にどのように結びつき, PRO_{arb} とどのような関係にあるのか。

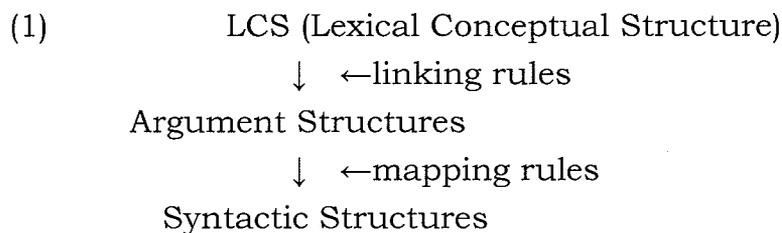
(i) に関しては, 英語の音声放出動詞 (sound emission verbs) を取り上げ, その概念構造表示に二つの空範疇がどのように関わっているかを明らかにする。さらに, それぞれの空範疇がどのような特性をもっているか, PRO_{obl} と PRO_{arb} との比較を通して検討する。(ii) に関しては, 従来統語論でのコントロールの議論で主たる対象となってきた *force* や *promise* などの動詞を取り上げ, その概念構造表示はどのようなものか, そして統語構造表示とどのように結びつくかといった問題を考察することを通して, 取り扱う。(iii) に関しては, 中間構文の概念構造表示には, \emptyset の空範疇が大きく関わっていると考えられるので, この構文の意味表示と統語表示, そして両者の結びつきを議論して行くことを通して, 考察して行く。

本研究報告書の構成は以下の通りである。まず、第2章では、本研究課題が基づく理論的前提について説明している。採用している理論的枠組、概念構造表示に関する前提、概念構造表示から統語構造表示への結びつき方に関する前提が紹介される。第3章は、(i) に関係した英語の放出動詞の考察にあてられている。第4章は、(ii) の問題に関係した *to*-不定詞補語をとる動詞構文の議論にあてられている。第5章では、(iii) の問題に関係した中間構文の意味論と統語論の結びつき方を議論している。最後に、第6章では、概念構造における空範疇に関する研究全体にわたる結論である。

第2章：理論的前提

2.1 理論的枠組み

本研究は、統語論及び意味論の関係に関して、基本的に以下のようなモデルを想定している：



この(1)のモデルは、概念構造意味論の分野の代表的文献である、Rappaport & Levin (1988), Levin & Rappaport Hovav (1995), Rappaport Hovav & Levin (1998), Pinker (1989), 影山 (1995), Kageyama (1997)等においても用いられているものである。

しかしながら、本研究が理論的前提で上記の研究者と異なる点は、概念構造の表示の仕方に関してである。その主たるものは、Means/Instrumentの表示に関してである。

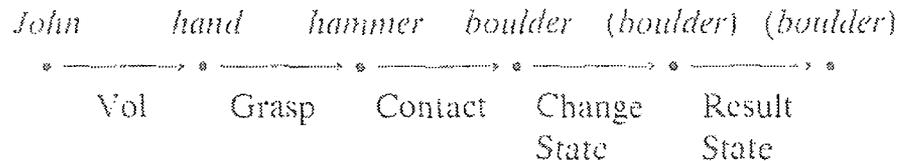
2.2 概念構造表示に関する前提

最も大きな相違点は、上位事象構造の表示の仕方においてである。筆者が採用するモデルでは、この表示に関して、Croft (1991)の "Causal Chain"の概念を導入している。例えば、(2a), (2b)は、Croft では(3a), (3b)のように表示される：

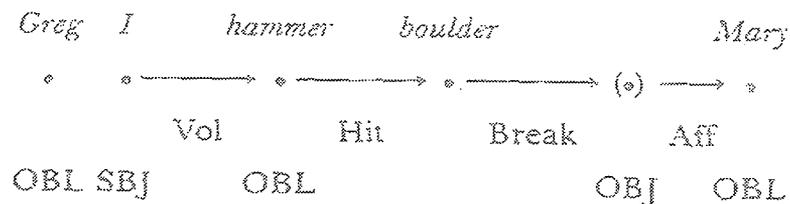
- (2) a. John broke the boulder with a hammer.

- b. I broke the boulder with Greg for Mary by hitting it sharply with a hammer.

(3) a.

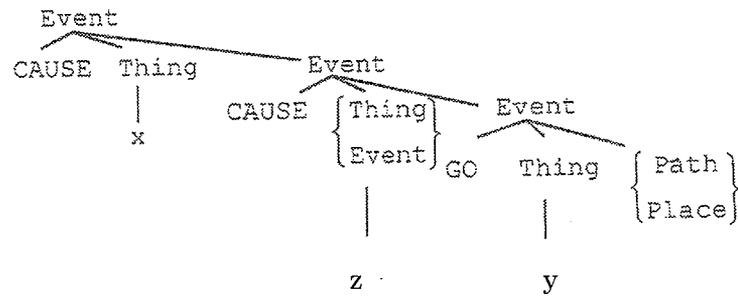


b.



上記の図における‘・’は項 (argument)を，‘→’は，項から項への働きかけを表わしている。ここで，以下に提示する本研究のモデルに本質的関連性をもってくる点は，“Causal Chain”における Instrument や Means の位置である。すなわち，Agent や Patient は，それぞれ，“the initiator of an act of volitional causation,” “the endpoint of an act of physical causation” (p. 176) と定義されるのに対し，Instrument や Means は，“Causal Chain”における相対的位置によって決まってくると規定されている。以下に採用されているのは，Instrument/Means が使役において，中間的位置を占めるという考え方である。使役におけるこの中間的位置は，概念構造においては CAUSE-関数を重複させることにより，以下のように表示できると想定する^{1,2}：

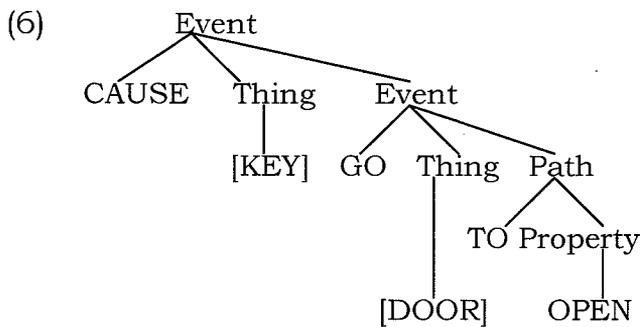
(4)



(4) の構造において、X が Agent に、Z が Instrument/Means に、Y が Theme に、それぞれ相当する項である。Instrument/Means が CAUSE-関数の項であるとする理由は、X である Agent が欠けている時、そのまま次のような使役文としての表示を許すからである：

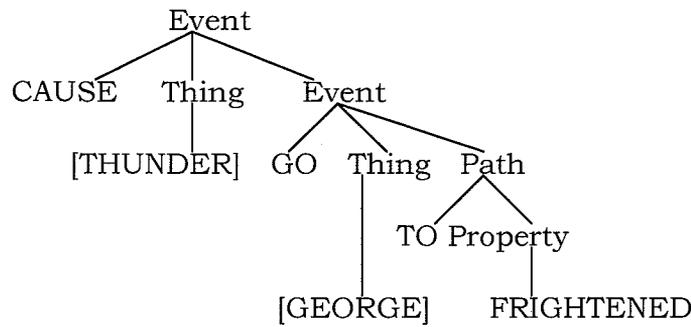
- (5) a. The key opened the door.
- b. A typhoon hit Japan.
- c. Excessive drinking injured his health.

例えば、(5a) の文は、(6) のように表示される：



また、Agent ではなく Cause を主語にとる感情動詞も、(5)の文と同様に一重の CAUSE-関数構造からなる。例えば、(7a)の文は (7b)のように表示される：

- (7) a. The thunder frightened George.
- b.



Croft (1991) の "Causal Chain" モデルにおいて、使役の連鎖は、「潜在的には、無限に過去または未来に拡張することができる」(p.172) ように、このモデルにおいても、中間的な CAUSE-関数の数は、不特定であると想定する。中間的な使役の鎖の数が不特定であるということは、Z の位置に変項として起こる Instrument/Means が、付加詞として統語的に実現する時、それらが任意的に生じることと相関関係にある。しかしながら、このことは、節における統語的な付加詞の数が無限であることを、意味しているわけではない。Quirk et al. (1985: 557-8)でも記されているように、同じ種類の付加詞の連続は、統語的な実現においては避けられる傾向にある。その理由の一つは文体的なものであり、もう一つは、同じ形態の付加詞の連続は最初のものが二番目の付加詞の修飾語と取られる傾向にあるためである。したがって、最初の理由から以下の (8) の文は避けられがちであり、二番目の理由から (9) の文は退けられる：

(8) *He spoke *stupidly frequently*.

(9) *He always writes *deliberately carelessly*.

さて、Instrument/Means が Y の位置を占めるとしても、この二者が概念構造においてどう表示仕分けられるかということ、明確にしておく必要がある。まず、取り上げられるべき問題は、二者が同時的に生じる時の相対的な位置関係である。この問題に関して示唆的なのは、Quirk et al. (1985: 561) の異なる過程付加詞同士の共起制限についての記述である。それは (10) のような例に

より示されている：

(10) He travels economy (class) by air but first (class) by train.

[means + instrument]

これと逆の順序の場合は、容認度は低くなる：

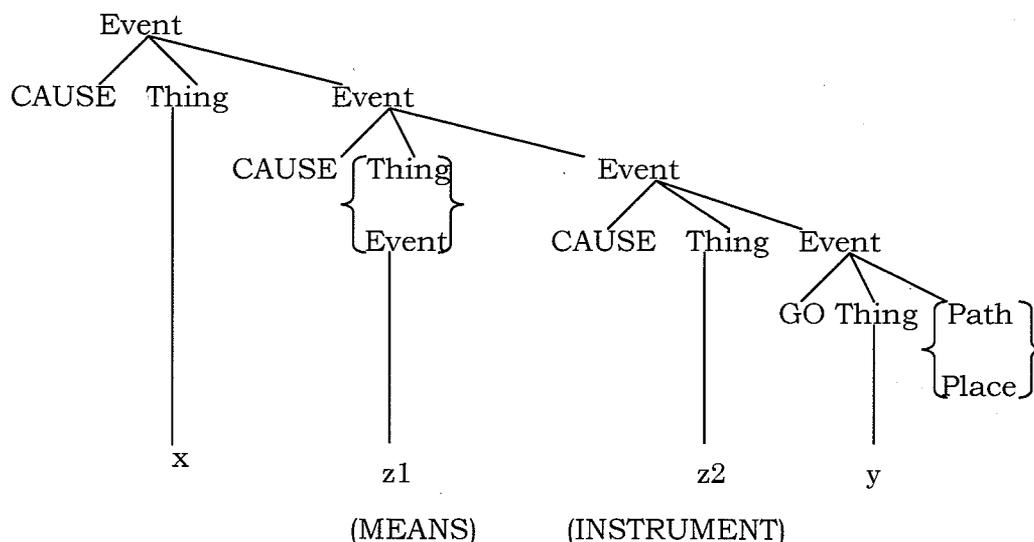
(11) *He travels by air economy (class) but by train first (class).

したがって、導き出される順序は以下のようなのである：

(12) Means > Instrument

(12) のような生起順序が妥当なものであるとすると、(4) の z の位置はさらに、以下のように区分されることになるう：

(13)



では次に、投射の順序以外にこの二者はどのような特性の違いによって識別されるのだろうか。まず、手段の付加詞は *by* を伴って動名詞句の形態を取る場合と副詞または前置詞句の形態を取る場合の二通りがあるのに対して、道具の付加詞は動名詞句は取らず、もっぱら副詞または前置詞句の形態のみである：

(14) a. She was accidentally struck *with a racket* by her partner.

b. She examined a fossil *microscopically*.

[Instrument]

(15) a. The doctor treated the patient *homeopathically*.

b. He stopped the machine *by pressing the button*.

[Means]

(15b) のような動名詞句をとる手段の付加詞は、主語指向的である。なぜなら、(15b)の文は、(16b) の下段の文を含意するからである：

(16) a. He flew to Europe by British Airways.

≠> He was by British Airways.

b. He stopped the machine *by pressing the button*.

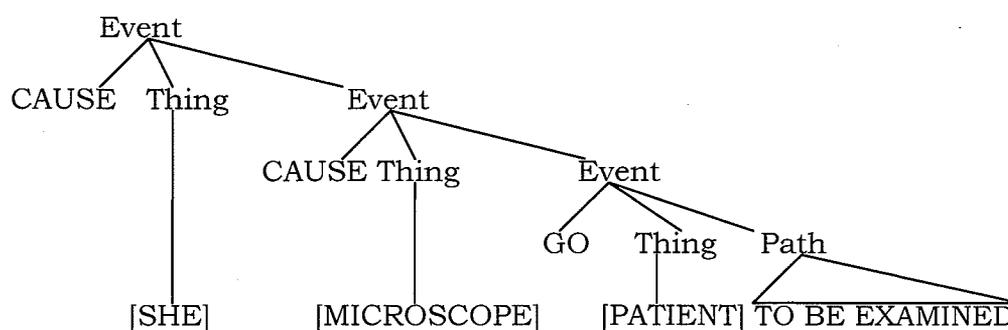
=> He pressed the button.

c. They saved up to £15,000 per patient *by using the air ambulance* to transport patients between hospitals.

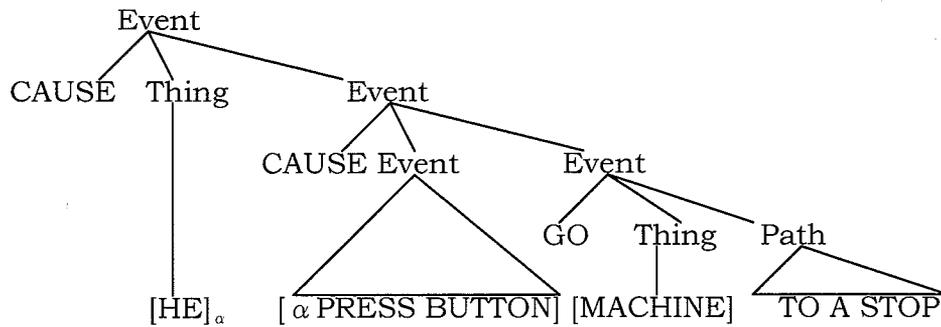
=> They used the air ambulance.

上記の事実から導き出される仮説は、Instrument は非節構造(non-clausal structure)的項であるのに対し、Means は非節構造的項でも節構造(clausal structure)的項でもありうるということである。従って、概略 (14b) は (17a), (15b) は(17b) のように概念構造表示されることになる：

(17) a.



b.



なお、概念構造表示に用いられる項の種類に関しては、序章でも記したように、以下の三種類があると想定している：

- (18) a. 変項 (variable)
- b. 定項 (constant)
- c. 空範疇 (empty category)

2.3 概念構造表示から項構造、統語構造への結びつき

(1) における語彙概念構造 (LCS) が統語構造に直接的に写像されるか項構造 (argument structure)を通してなされるかは議論の余地のあるところである。しかしながら、筆者は Marantz (1984), Pinker (1989), Levin & Rappaport Hovav (1995)などの語彙概念構造意味論の近年の研究にのっとり、後者の立場をとる。従って、項構造には三つの項が存在すると仮定する: (i) 外項(external argument); (ii) 直接的内項(direct internal argument); (iii) 間接的内項(indirect internal argument)。これら三つの項構造の項は、以下のように表記される：

- (19) a. 外項 : x
- b. 直接的内項 : <y>
- c. 間接的内項 : <P_{loc} w>

そして、(4) のような語彙概念構造から項構造への結びつけ規則に関しては、暫定的に以下の(20)-(22)の三つの規則が関わっていると考える。

(20) Outermost Cause Linking Rule

The first variable argument of the outermost CAUSE-function is linked to the external argument of the verb.

(21) Directed Change Linking Rule

The first variable argument in a GO-function structure is linked to the direct internal argument of the verb.

(22) Path/Place Expression Linking Rule

The variable argument of a Path/Place-function is linked to the indirect internal argument of the verb.

(20) の規則の適用は、(1-3a, b) のような二重の CAUSE-関数の構造に適用された場合には、どちらも、[JOHN] が外項に結びつき、(2-6b) のような一重の CAUSE-関数の構造に適用された場合には、[KEY] が外項に結びつく。³ この規則に関しては、第4章の中間構文の派生の議論において、部分的修正を行なうことになる。(21) の規則の適用は、たとえば、(1-3a), (1-3b) の構造に適用された場合、前者は GO-関数の項である [PAINT] が、後者は [WALL] が、直接的内項に結びつくことになる。

また、これらの規則の適用順序は以下のようなものである：

(23) Outermost Cause Linking Rule > Directed Change Linking Rule > Path/Place Expression Linking Rule

また、これらの三つの項は統語構造 (D-構造) では、それぞれ、次の位置に投射されるとの前提に立つ: (i) 外項は動詞の指定部位置に投射される、すなわち、他動詞の主語及び非能格自動詞の主語に; (ii) 内項は動詞に統率された位置に投

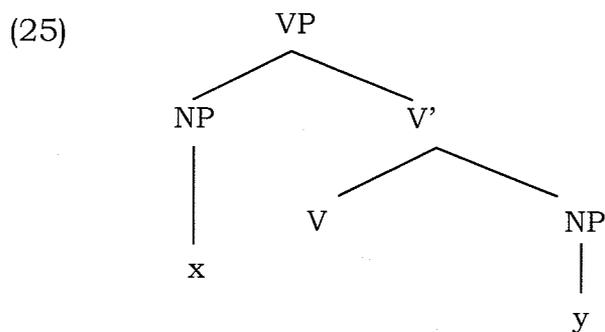
射される, すなわち, 他動詞の目的語, 及び「非対格仮説(Unaccusative Hypothesis)」に従って, 非対格自動詞の主語の位置に。言い換えれば, 他動詞, 非能格自動詞, 非対格自動詞は, それぞれ, (24)のような項構造をもつ:

(24) a. 他動詞: (x <y>)

b. 非能格: (x <>)

c. 非対格: (<y>)

そして, D-構造での項の位置は, (25)のような図に表わすことができる:



第3章：英語の音声放出動詞と空範疇*

3.1 はじめに

本章の目的は、二通りである。一つは、英語の音声放出動詞 (English sound emission verbs) に主たる焦点を当てて、どうさ行為動詞 (action verbs) の概念構造を探ることである。ここでの動作動詞とは、いわゆる非能格動詞 (unergative verbs) といわれている動詞 (e.g. *laugh, work, walk*) と接触・打撃を含意する他動詞 (e.g. *hit, push, kick*) の両方を指している。そして、これはちょうど Vendler (1967) の活動動詞 (activity verbs) に相当する。もう一つの目的は、音声放出動詞の概念構造表示で用いられている二つの空範疇の性格を明らかにすることである。

本章の構成は以下の通りである。第2節では、行為動詞の意味的振る舞いを特徴付ける特性はどのようなものであるかを示す。第3節では、第2章で提示した理論的前提に基づく英語音声放出動詞の分析を行い、それを支持する論拠を提示するとともに、第2節で示した行為動詞の意味的振る舞いがどのように説明されるか明らかにする。さらにここでの分析がどのような点で先行研究での分析より優っているかについて述べる。第4節では想定している概念構造における二つの空範疇に関して、統語上の空範疇と比較しながらその性格を探っていく。

3.2 行為動詞の意味的振る舞い

どのような意味的な特性が行為を表わす (1) のような文の振る舞いを決定するのだろうか？

- (1) a. The rats ran.

- b. How many hours do you work?
- c. Do you skate?
- d. Tony sneezed.
- e. He pushed the cart.

そして、どのような特性が他の Event のタイプから行為を分かつのだろうか？
この節ではこのような問題を検討してみよう。

Vendler (1967) で記されているように、行為を表わす表現を特徴付ける重要な特性の一つは、時間上に進行する過程を示している、すなわち、時間的などのような終着点も表わしてはいない、ということである。それゆえ、(2) におけるような進行相を許容する：

- (2) What is he doing?
 - a. He is running/writing/working ...
 - b. *He is knowing/loving/recognizing ...

know, love, recognize のような動詞は進行している過程ではなく状態を表わしているため、このテストにはかからない。

さらに、行為を表わす表現は、*For how long ...?* を用いた疑問文の答えとなりうる：

- (3) a. For how long did he run?
 - b. For how long did you skate?
 - c. For how long did Tony sneeze?
 - d. For how long did you work?
 - e. For how long did he push the cart?

これに対して、終着点を示す *draw a circle, build a house* のような達成動詞の表現は、*For how long ...?* を用いた問の答えとはなりえない：

(4) a. *For how long did he draw a circle?

b. *For how long did they build a house?

他方、これらの達成動詞は *how long did it take to ...?* を用いた問の答えとなりうる :

(5) a. How long did it take him to draw a circle?

b. How long did it take him to build a house?

同じことは、*For how long ...?* という問いに対応する答えについても当てはまる :

(6) a. He ran for an hour.

b. I skated for half an hour.

c. Tony sneezed for a couple of minutes.

d. I worked for 5 hours.

e. He pushed the cart for an hour.

(7) a. *He drew a circle for a minute.

b. *They built a house for two months.

逆に、行為を表わす表現は 時間上の終着点を示す *in* を用いた句とは共起しないのに対し、達成的な表現は共起しうる。(8) と(9) を比較せよ :

(8) a. He drew a circle in 5 seconds.

b. They built a house in a month.

(9) a. *He ran in an hour.

b. *I skated in an hour.

c. *Tony sneezed in a couple of minutes.

d. *I worked in 5 hours.

e. *He pushed the cart in an hour.

さらに、行為を表わす表現は時間上の終着点を示さないので、*a lot* や *hard* などの数量的な修飾語句を許容するのに対し、達成を表わす表現は許容しない：

- (10) a. He ran a lot/hard.
b. I skated a lot/hard.
c. Tony sneezed a lot/hard.
d. I worked a lot/hard.
e. He pushed the cart a lot/hard.

- (11) a. *He drew a circle a lot/hard.
b. *He broke the vase a lot/hard.

同様に、行為動詞は繰り返すことができるが、達成動詞や到達動詞はそれができない。以下を観察されたい：

- (12) a. He pushed and pushed the cart.
b. He ran and ran.
c. We laughed and laughed.

- (13) a. *We broke and broke the window.
b. *We painted and painted the house.
c. *I arrived and arrived at the town.
d. *She lost and lost the wallet.

行為動詞のもう一つの特性は、影山 (1996) が記しているように、(14) におけるように、*give (NP) a V* 構文に生じることができるということである：

- (14) a. give a cry/laugh/cough/sigh/moan ...
b. give (NP) a kick/kiss/blow/push/punch ...

これとは対照的に、達成表現はこの構文には起こることができない：

- (15) a. *He gave a draw/drawing of a circle in a second.

b. *He gave a run of a mile in an hour.

日本語における *hito V-suru* 構文はまさに *give (NP) a V* 構文に対応する。

次を観察されたい：

(16) a. *hito hasiri-suru/oyogi-suru/suberi-suru/warai-suru/*

b. *hito oshi-suru/keri-suru/tataki-suru ...*

Levin and Rappaport Hovav (1995), 影山 (1996) 等 で記されているように、行為動詞を他のタイプの Event 動詞から区別する重要な統語的特性がある。それは形容詞的受身化 (adjectival passives) できないということである。

次の例に注目されたい：

(17) a. *a run man, *coughed patients, *a laughed clown ...

(Kageyama (1996: 95))

b. *a hit boy, *the kicked man, *a wiped table ...

(Ibid.: 102)

(17a, b) と非対格動詞と状態変化の他動詞を用いている (18a, b) をそれぞれ比較されたい：

(18) a. *our fallen bridges, some wilted vegetables, Lawrence*

Ferlinghetti 's Picture Of The Gone World, collapsed stems

... (from British National Corpus)

b. *a broken glass, cooked food, boiled eggs, baked potatoes ...*

自動詞に関する限り、影山 (1996) などによって指摘されているように、非能格自動詞は接尾辞 *-able* を用いた語形成を被るが、非対格自動詞はそうではない¹：

(19) a. *a laughable suggestion, runnable stretch of white water, a*

singable tune, swimmable water, walkable hills, workable

solutions ... (from British National Corpus)

b. *goable days, *fallable leaves, *arrivable packages,

*appearable books ... (Kageyama (1996:97))

非能格自動詞を非対格自動詞から識別するもう一つの統語的な特性がある。それは、前者が同属目的語を許すのに対して、後者は許さないということである。(20) と (21) の対比がそれを示している：

(20) a. He laughed a hearty laugh.

b. She danced a beautiful dance.

c. She slept a sound sleep.

d. He sighed a deep sigh.

e. He lighted the lights.

(21) a. *He fell a nasty fall.

b. *I collapsed an utter collapse.

c. *He slipped an embarrassing slip.

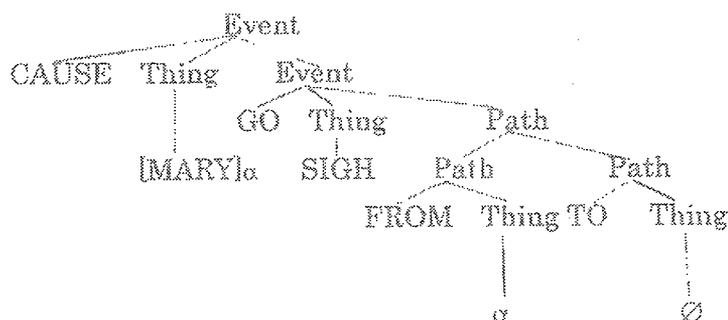
d. *He sank a deep sink.

本節を要約すると、行為は時間上の終着点を示さないので、行為に関わる表現は到達や達成に関わる表現とは対立的な振る舞いを示す。これらの振る舞いは時間の副詞句や数量的な修飾語句との共起や *give (NP) a V* 構文での生起、形容詞的受動化を受けることなどに関わっている。

3.2 「使役の連鎖」モデルでの英語音声放出動詞の分析

第2章での本研究の理論的前提をもとに、本節では英語の音声放出動詞がどのように意味表示されるか検討してみよう。たとえば、動詞 *sigh* 含むを文は、(22) のように意味表示されると提案する：

(22) Mary sighed.



上図では、変項 [MARY] が CAUSE-関数の最初の項であり、定項 SIGH が GO-関数の最初の項の位置を占め、FROM-関数の項の位置を占める α は変項 [MARY] によって束縛されている空範疇であり、そして TO-関数の項の位置を占めるのは不特定の項を表わすもう一つの空範疇 \emptyset である。それゆえ、(22) の構造が表わすのは、‘Mary caused (a) sigh to go from within herself.’ のような意味である。

まず、なぜ 音声放出動詞が (2-4) のような二重の CAUSE-関数の構造ではなく、一重の CAUSE-関数の構造なのか、という疑問が起きるかもしれない。これは殆どの音声放出動詞 (e.g. *sigh, sneeze, cough, snort, etc.*) の主語は意識的な行為者ではないという事実によるものである。しかしながら、このことは、音声放出動詞が意識的な行為者を取らないということではない。コンテキストによっては、たとえば、音声放出動詞が様態の副詞や目的節と共起することが許される。次のような例に注目されたい：

- (23) a. He laughed quietly not to wake up the children.
 b. He coughed three times to his accomplice in the house
 to let him know that someone was coming.
 c. She carelessly sighed deeply to his boss.

言うまでもなく、これらの用法は、(2-4) のような二重の CAUSE-関数の構造で表わされる。

さて、音声放出動詞の意味表示に、(22) の図におけるように関数 GO が含まれるべきか否かという問題を検討してみよう。まず、次にあげる論拠は、GO-関数中の FROM-関数にかかわるものである。FROM-関数の存在は、次の (24) に見られるように、英語の音声放出動詞は随意的に *from-within* という phrase を取りうるという事実によって確かめられる。²

- (24) a. Jay sighed deeply *from within*.
b. “O God,” I groaned/cried *from within*.
c. He laughed *from within*.
d. “Oh no,” she screamed *from within*.

また、次のような例も傍証となるであろう：

- (25) A voice *from within* told me to refuse.

さらに、このような *from-phrase* が以下に見るように目的語をとる場合がある：

- (26) a. Jay sighed *from her guts*.
b. “Oh no,” she screeched/cried *from her guts*.
c. He laughed heartily *from his guts*.

これらの目的語は音声放出と関係した主語となる項の体の部分を表わす時にのみ生じる。すなわち、体の部分が特定されていない時には、FROM-関数は変項 X によってコントロールされている非明示的な要素を項としてもっているということになる。これは、(27) のように *from-phrase* が音声放出と関係した X の体の部分ではないものを目的語として取った場合には、容認されないことから確かめられる：

(27) a. *Jay sighed from her purse.

b. *John cried from his leg.

次にあげる論拠は、GO-関数中の TO-関数にかかわるものである。TO-関数の存在は、次の (28), (29) に見られるように、英語の音声放出動詞は随意的に着点を表わす句や不変化詞を取りうるという事実によって確かめられる：

(28) a. I used to sing *to her*.

b. He chuckled *to himself* over what he was reading.

c. Each laughed *into each other's face*.

d. "Me and all the other old ducks," I muttered *to myself*.

e. She shouted *to me* across the valley.

f. The wind shrieked *across the plains*.

g. He cried *to heaven* for vengeance.

(29) a. "Shame on you!" he cried *out* angrily.

b. "Ready?" he sang *out*.

c. She shrieked *out*.

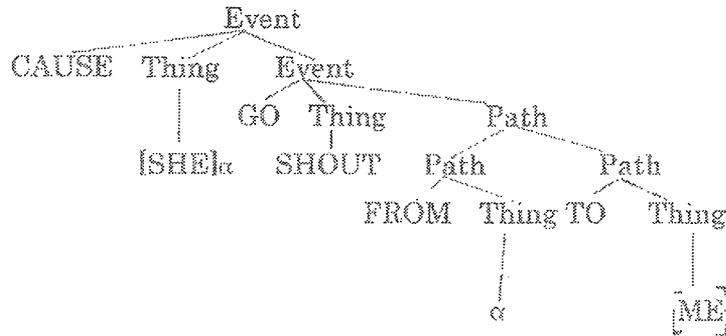
d. She yelled *up[down]* at him.

e. She sighed *out* in ecstasy.

(Kenkyusha Dictionary of English Collocation)

上記の表現に見られる Goal-関数は、動詞の LCS に内在する Source-関数と共に、複合的な Path-関数を形成すると考えられる。たとえば、'She shouted to me' という文は以下のような表示をもつ：

(30)



もう一つの Path-関数を示す論拠は、(31) におけるように、音声放出動詞はしばしば物体の方向付けられた動きを表わす *directional phrase* を取るというよく知られた事実からきている：

- (31) a. The cart rumbled down to the end of the street.
 b. The car buzzed along the road.
 c. Water thundered into the gorge.

この種の含意はどこから来ているのだろうか？この種の例に特徴的なのは、主語によって示されている物体の動きは、必然的にその物体によって放出される音を伴っている。すなわち、動きのないところでは音の放出はない。それゆえ、この種の含意は、(22) のような構造とその物体に関する内在的な知識との結合から来ている。換言するならば、(31) のような文は、間接的ながら音の放出動詞の意味構造における Path-関数の存在を指し示す証拠となりうるといえよう。

では次に、(31) の構造における定項の存在に関する論拠に話を移そう。最初に挙げられる論拠は、(20) に見られたような、音声放出動詞と共起する同属目的語から来ている。ここでは、(32) として繰り返す：

- (32) a. He laughed a hearty laugh.
 b. He sighed a deep sigh.
 c. They talked small talk.

d. Bill shrieked a painful shriek.

同属目的語を伴う構文のタイプは、その目的語が新情報を伝達している時、最も適切である。したがって、(32) の文は下の (33) よりより自然である：

(33) a. *He laughed a laugh.

b. *He sighed a sigh.

c. *They talked a talk.

d. *Bill shrieked a shriek.

というのは、(33) の目的語は単に動詞が記述している出来事を繰り返しているに過ぎないからである。このことは、明らかに(22) で見たように、音声放出動詞の語彙構造表示に定項が存在することを指し示している。⁴

類似した議論は、(14) の文における *give a V* 構文に対しても適用できる。

[14] の文は、以下 (34) として繰り返す：

(34) a. He gave a piercing shriek of joy.

b. He gave a hysteric laugh.

c. He gave a sigh of relief.

d. He gave a peremptory cough to declare his presence.

(Kenkyusha Dictionary of English Collocation)

give a V 構文とそれと対応する単一動詞構文の間に成り立つパラフレーズの関係は、所有の移動を表わす動詞 *give* の LCS (語彙概念構造) をもとに、容易に説明することができる。その LCS は次のようである：

(35) *give*: [CAUSE([]_α, [CAUSE([]), [GO([]), [[FROM([α]),
[TO([])]])]]])]

構造 (35) と (22) は基本的には同一である。違いは単に前者が GO-関数の最初の項として変項をもつものに対して、後者は定項をもっているということ；そし

て、前者が二重の CAUSE-関数をもつものに対して、後者は単一の CAUSE-関数構造であること；前者の TO-関数の項は義務的であるのに対して、後者のそれはしばしば特定化されないままである。

さて、ここで第2節で見たような、非能格自動詞と結びついているアスペクト現象について考えてみよう。特に、音声放出動詞と結びついている非有界的読み (atelic reading) は、どう説明されるだろうか？(22) の構造がこの問いへの手がかりを提供してくれる。すなわち、この構造には直接的内項と結びついた変項がなく、加えて、通常 Goal-関数の項もない。それゆえ、Tenny (1994) の用語によるならば、Event を計量する顕在的な項が存在し得ない、かくて非有界的な読みが生じる。したがって、(22) の構造は (2)-(13) の文と結びついたアスペクト的特性の説明を可能にしている。

この非有界的な読みと相関関係にあるのが、(17a) に示されているような音声放出動詞の形容詞的受身の形成である。Kageyama (1995:118) は、この形成を次のように定式化している：

(36) [EVENT ... [EVENT y BECOME [STATE y BE AT-Z]]] →

y₁ BE WITH [EVENT ...y BECOME[STATE y₁ BE AT-Z]]

(36) が示しているのは、状態変化を被るもの (y) を状態変化の構造から取り上げ、それを新に導入された述語 BE WITH の主語に格上げする操作である。ここではこの分析の詳細に立ち入るつもりはないが、決定的に重要なことはそのものを示す顕在的な項の存在である。そのような顕在的な項は (22) には存在しない。なぜなら、GO-関数はその項として定項をもっているからである。かくして、形容詞的受身化は音声放出動詞には適用されない。

本節においては、非能格自動詞の一つのタイプである英語の音声放出動詞が、

(22) におけるような空範疇を用いた概念構造表示をもつことを支持する論拠を提示してきた。本分析の大きな特徴の一つは、空範疇を立てるならば「行為」も「使役」の一種として扱うことができることである。その結果として、主語が動作主である場合とそうでない場合の相違、(24) および (26) におけるような Source を示す表現との共起、(28) および (29) に見られる Goal を示す表現との共起、単一の音声表出動詞の構文とそれに対応する同属目的語構文との関係および *give a V* 構文との関係が、的確に説明されることになる。先行研究 (Pinker (1989), Levin and Rappaport (1995, 1998), Kageyama (1996)) の殆どがそうであるように、ACT あるいは DO といった一項の関数を立てる分析では、上記のような事柄はそのままでは説明しえず、述語の合成といったアド・ホックな手段に頼らざるを得ない。

3.3 概念構造における空範疇の特質

3.2 節においては、英語の音声放出动詞の語彙項目の形成に、概念構造における二つの空範疇、(i) $\alpha, \beta, \gamma \dots$, (ii) \emptyset , がどのように関与しているか見てきた。多くの語彙項目の構造や構文でこの二つの空範疇の有用性が検証されていない現在、これらの空範疇の性格を問題にするのは時期尚早かもしれないが、本節では、GB 理論における空範疇と比較しながら、その性格を探ってみたい。

GB 理論の枠組みでは、4つの種類の空範疇が認められている。すなわち、(i) PRO; (ii) *pro*; (iii) NP-trace; (iv) *wh*-trace である。これら4つは、 $[\pm a(\text{naphor})]$ と $[\pm p(\text{ronominal})]$ の素性によって、以下のように特徴付けられている：

- (37) a. $[+a, +p]$: PRO
b. $[+a, -p]$: NP-trace

c. [-a, +p]: *pro*

d. [-a, -p]: *wh*-trace

取り上げるべき最初の問題は、概念構造上の二つの空範疇は、どれに最も似ているだろうか？統語上の四つの空範疇の中で PRO 以外の空範疇は特定の音声内容をもつ名詞句と対応関係にある。名詞句に相当するカテゴリーは概念構造にはないので、二つの空範疇のどちらも最も近いのは PRO といってよいだろう。では、素性構成の点からまず α の性質を考えてみよう。 α は、先行詞を必要とする点において [+anaphoric] である。これははっきりと (22) 及び (1-3b) において観察できる。また、この空範疇は遠くの先行詞をもつことができるという点では代名詞類と似た性質をもっている。(22) においては、Path-関数の項である α は 遠く CAUSE-関数の最初の項の位置に先行詞をもっている。これは以下で見るのと類似した状況である：

(38) They_i thought [that I said [that it would be difficult [PRO_i to feed each other]]]

したがって、この二つの点から、 α は [+a, +p] と特徴付けることができるであろう。しかしながら、素性構成の点では同一であったとしても、この二つのカテゴリーは決して同じものではない。決定的な相違は有名な PRO の定理に関わるものである：

(39) PRO theorem

PRO must be ungoverned.

上記の定理により、PRO は以下のような非定形節の主語の位置のみの生起に限定される：

(40) a. Poirot_i is considering [_{CP} whether [_{IP} PRO_i to abandon the investigation]].

- b. Poirot_i needed a lot of courage [CP [IP PRO_i to abandon the investigation]].
- c. Poirot_i was glad [CP [IP PRO_i to abandon the investigation]].

(Haegeman (1991: 263))

他方、 α は節の主語に結びつく項にのみその生起が限定されているわけではない。Path-関数の項として働いている(22) の α がまさにその良い例である。この相違はどこからくるのだろうか？これは統語レベルの名詞句と意味レベルで関数の項として生じる要素との相違によるものである。統語構造におけるあらゆる名詞句は、顕在的であろうとなかろうと、格理論の支配下にある。他方、概念構造の項の位置にあるすべての要素は音形を欠く、したがって、格付与を免れる。

格付与における相違は分布という別の相違と相関関係にある。PRO は顕在的な NP と相補分布をなす。これは概念構造における α と変項には当てはまらない。(22) における ‘Mary sighed’ のような文と (26) における ‘Mary sighed from her guts’ の対比で見られるように、両者は相互に交替可能である。

では、空範疇 \emptyset の場合を考えてみよう。 \emptyset は同じ文中に指示物 (referent) をもたないという点で PRO_{arb} と同様に[+pronominal]である。たとえば、(22) の構造において \emptyset は特定の場所を指すのではなく ‘within Mary’s body’ 以外のどんな場所でも指しうるということである。また、(1-3a) の構造では、 \emptyset はペンキを壁にスプレーするための特定の手段を指してはいない。

先行詞と照応形との関係を除いては、 α と PRO_{obl} の相違について言えることはそのまま、 \emptyset と PRO_{arb} にも当てはまる。まず第一に、 \emptyset の生起は節の主語となるべき項位置のみに限定されているわけではない。たとえば、(22) におい

ては、 \emptyset の生起は Path-関数の項の位置である。さらに、それは変項と相補分布をなしてはいない。これは、(22) と (30) の対比によって目撃される。(22) における \emptyset は、(30) においては顕在的な要素 [ME] によって置き換えられている。

第4章：義務的コントロールと TO-不定詞補文構造*

4.1 はじめに

本章では、義務的コントロールに対応するこの α に関して、以下のような問題を探っていくことにする：

- (1) i. コントローラーとなる意味要素はどのような種類のものか？
- ii. コントロールされる要素はどのようなもので、コントローラーとどのような関係にあるのか？
- iii. 一つのコントローラーがコントロールする要素は一つのみか、あるいは複数の要素が許容されるのか？
- iv. 統語表示における PRO_{obl} は、意味表示における α に対応するものか？

本章の構成は次のとおりである。第2節では、(2i)のコントローラーの問題を取り上げる。第3節では、(2ii,iii)のコントロールされる要素に関わる問題を検討する。第4節では、(2iv)の統語上の義務的 PRO と α との関係を考察する。さらに、コントロールの議論でよく取り上げられる、to-不定詞をとる動詞 *force* と *promise* の相違を、前節までの意味表示におけるコントロールの取り扱いと関連させながら考察する。

4.2 コントローラーはどのような要素か？

さて、本節ではどのような意味要素がコントローラーになりうるか、探っていくことにする。概念構造において、項となりうる意味要素は次の三種類である：(i) 変項；(ii) 定項；(iii) 空範疇。

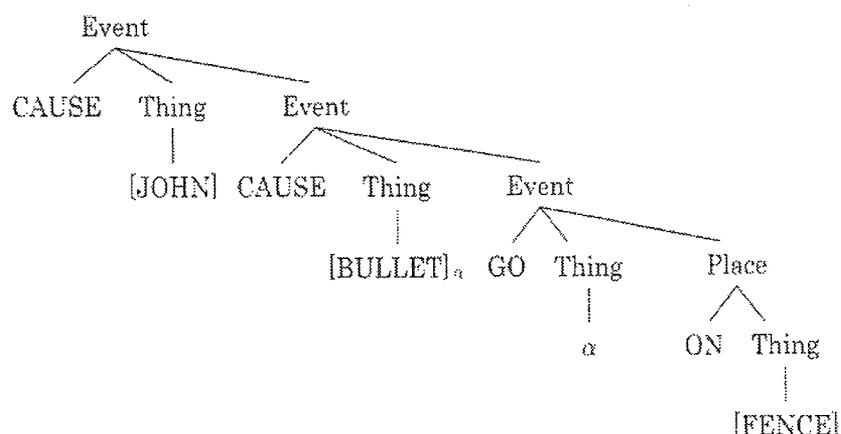
では、これら三種の意味要素のうち、義務的コントロールのコントローラー

になりうるのはどれであろうか。まず、序章の(3b)¹の[PAINT]のように、変項が第一の候補に挙げられることは、間違いのないであろう。その外に変項がコントローラーである例を Inoue (2001a)から拾うと次のようなものが挙げられる。以下の(2a,b)における動詞 hit を用いた文は、それぞれ(3a,b)のように表示される:

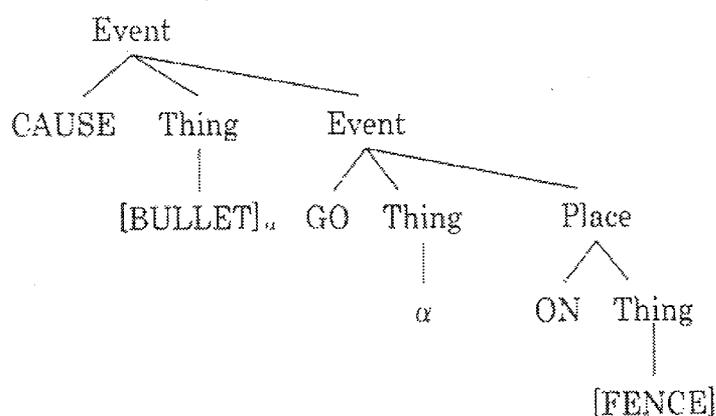
(2) a. He hit the fence with a bullet.

b. A bullet hit the fence.

(3) a.



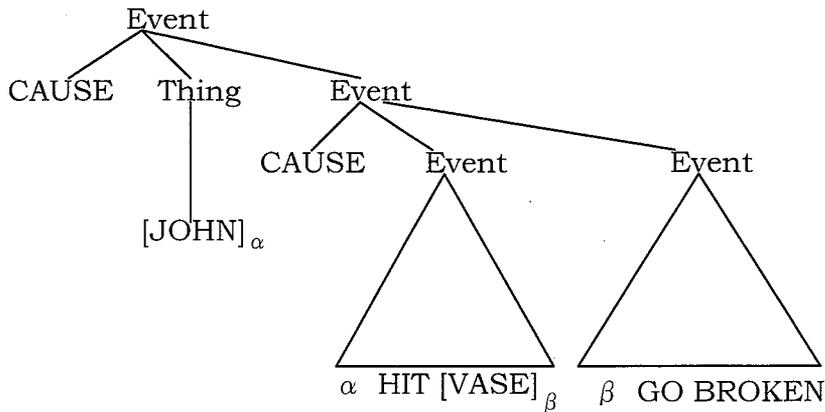
b.



また、手段の付加詞を含む(4a)の文は(4b)のように表示される:

(4) a. John broke the vase by hitting it.

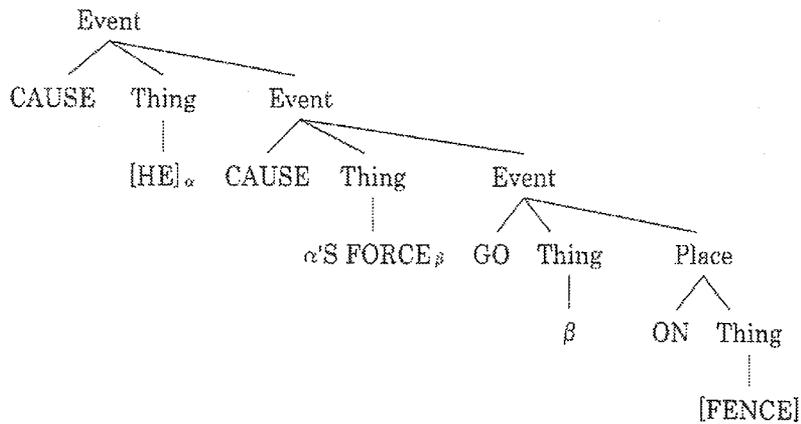
b.



しかしながら、変項のみがコントローラーとなりうる訳ではない。たとえば、(2a)の *hit* に対して、(5a)の *hit* の用法は FORCE という定項を包入しており、(5b)の図に見られるように β をコントロールしている：

(5) a. He hit the fence.

b.

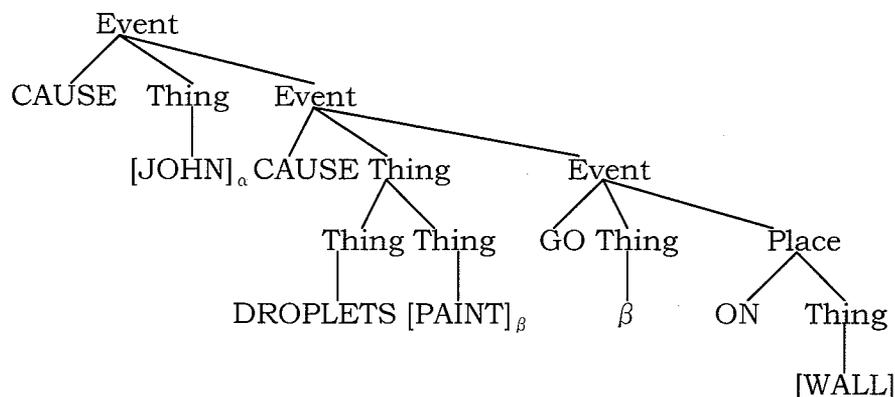


(2a)で[BULLET]がフェンスと衝撃を伴って接触をするのに対し、(5a)ではジョンの体からくる力でもって接触することになる。従って、 β のコントローラーは α を含む定項ということになる。

また、動詞 *spray* の *with* を伴う構文は、(1-3b)でも示したように、以下表わされている：

(6) a. John sprayed the wall with paint.

b.



ここでは β のコントローラーは定項と変項の両方を含む‘DROPLETS (of) [PAINT]’となっている。

従って、義務的コントローラーとなりうる要素は、一つには変項であるが、そのほか、変項を含む定項、または、別のコントローラーに束縛されている空範疇を含む定項も、ありうると言えよう。

4.3 コントロールされる要素はどのようなものか？

本節では、コントロールされる要素に関して、次の二点を探ってみたい。一つは、コントロールする要素とコントロールされる要素は、どのような構造的関係にあるのか。もう一つは、一つのコントローラーがコントロールするのは一つの要素のみか、複数の要素をもコントロールすることは可能かどうか、という問題である。

まず、前者の問題の検討から行なうが、その前に統語論でのコントローラーとコントロールされる要素との関係を見ておこう。これに関してのよく知られている原則は、Rosenbaum (1970)の“Minimal Distance Principle”である：

(7) Minimal Distance Principle (MDP)

An infinitive complement of a predicate P selects as its controller the minimal c-commanding noun phrase in the functional complex of P.

統語構造と意味構造は、本質的には別個のものであるので、単純に同じ原則が働いていると想定することはできない。しかしながら、仮に、infinitive complement とは、上位の関数構造が埋め込んでいる 関数の項、noun phrase に相当するものが[Thing] argument と仮定して、考えてみることにする。このように考える時、たとえば、(3a)の構造で、 β のコントローラーは、 β を c-command している最短の[Thing] argument である[BULLET]であって[JOHN]でないことは明らかである。(3b)に関しても、やはり α のコントローラーは[BULLET]であると正しく予測する。では、第3章の (1) の構造の α はどうであろうか。MDP に相当する原則に単純に従うならば、コントローラーは SIGH であって[JOHN]ではないはずである。(3a)と(3-1)との違いは何を意味しているのだろうか。おそらく、これは(3a)の変項 [BULLET]と(3-1)の定項 SIGH の相違からくると思われる。(3a)では α のコントローラーが変項[JOHN]であるためには同じく変項である[BULLET]が障壁となっているのではないか。それに対し、定項 SIGH は音形をもたず²、統語表示のレベルでは動詞 *sigh* に包入されてしまっているので、 α が変項[JOHN]によってコントロールされるのに障壁とはならないのではないかと思われる。

また、(5b)や(6b)のような、空範疇+定項、定項+変項といった複合的な構造を成す項の場合も、(3a)と同様、最上位の[Thing]argument が β のコントローラーとなるための障壁となっていると考えられる。

(3a)に見られるような、ある変項が別の変項のコントローラーとなるための障壁となるという状況は、統語論での義務的コントロールにも見られる状況であ

る。よく知られているように、to-不定詞をとる *persuade* や *force* といった動詞は‘object control’であると言われる。これは言い換えれば、母型文の主語の NP が不定詞の PRO のコントローラーになりうるのを、目的語の NP が阻む障壁となっているということである。コントローラーの選択に関して、両者に共通の原則が働いていることを示唆しているように思われる。

では次に、一つのコントローラーが複数のコントロールされる要素を許すかどうか、という問題の検討に移ろう。この種の状況は、統語的 PRO の場合はどうであろうか？ To-不定詞の PRO を subject control する *try*, *promise* などの動詞が目的節を取る場合がそれにあたると言えるであろう：

- (8) a. John tried to stop coughing in order not to disturb the others.
b. John promised her to give a Christmas present in order to please her.

意味的コントロールの場合も、主語指向の付加詞が並立する場合に、起こりうると思われる。一文中に、(4a)のような手段を表わす付加詞と目的節を表わす to-不定詞が並立する場合には、複数の α をとることになる。

4.4 意味表示のコントロールと統語表示のコントロール

本節で取り扱う問題は、意味表示における義務的コントロールは、統語表示における PRO_{obl} に対応するのか、あるいは両者は同一のものなのか、という問題である。これに対しては、必ずしも対応していないということができる。なぜなら、 PRO_{obl} の生起するのは不定詞や動名詞などを含む非定形節に限定されるからである。(3a,b)におけるような α , (5b), (6b)における β , (4b)における α などは、語彙項目の LCS の一部を成しているので、 PRO_{obl} には対応していないことは、明らかである。

しかしながら、その逆、すなわち、 PRO_{obl} は意味表示における義務的コントロールであるという可能性は残されているように思われる。以下に、統語論でのコントロールの議論でよく対象となる *force* と *promise* の二つの動詞を用いて、統語的コントロールと意味的コントロールの関係を探ってみよう。(18)と(19)の対比に見られるように、この二つの動詞では対照的な振る舞いを示す：

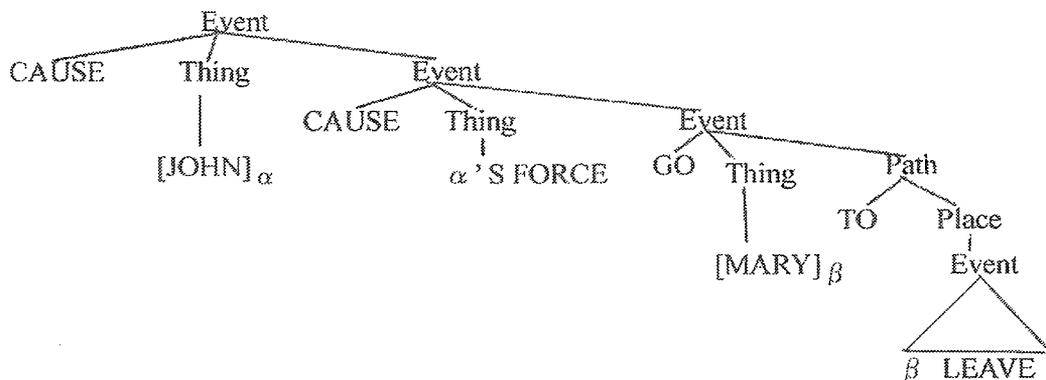
- (9) a. John forced Mary to leave.
b. *John forced to leave.
c. *John forced Mary an action.
d. *John forced to leave to Mary.
e. Mary was forced to leave.
- (10) a. John promised Mary to leave.
b. John promised to leave.
c. John promised Mary a present.
d. ?John promised to leave to Mary.
e. *Mary was promised to leave.
f. John promised Mary to be allowed to leave.
g. Mary was promised to be allowed to leave.

まず、(9a)と(10a)のコントロールにおける相違は、前者が *object control* であるのに対し、後者は *subject control* であるということにある。(9b)と(10b)の対比は、前者が目的語の NP を省略できないのに対して、後者はできるということを、示している。(9c)と(10c)の対比が示しているのは、*force* という動詞は、(9a)と並行する三項構文が存在しないのに対し、*promise* の場合は存在するという点である。(9d)と(10d)の対比は、(9a)に対応する(9d)は容認不可となるが、(10a)に対応する(10d)は容認度は下がるものの可能である。(9e)と(10e)の対比

が示しているのは、*force* は(9a)に対応する受身文(9e)が可能であるのに対し、*promise* は(10a)に対応する受身文(10e)は可能ではない。また、(10f,g)が示しているのは、*promise* の不定詞中の述語が(19f)のように受動態の場合、PRO は目的語のメアリーを指すと解釈され、そしてそのような場合のみ、(10g)におけるように受動文が成り立つ。

では、これらの対比が、意味表示におけるコントロールという概念を導入することによって、どのように説明されるか見ていくことにしよう。まず、(9a)のような文は、意味表示では(11)のような構造をもつと考えます：

(11)



(11)の構造が意味しているのは、「ジョンは自分の力を用いて、メアリーが立ち去るという事態に至らしめる」ということである。³ (11)の構造において、βのコントローラーがメアリーであってジョンではないのは、第4節で述べたように、ベータを c-command している最短の変項はメアリーだからである。言い換えれば、[JOHN]が β のコントローラーになることができないのは、変項 [MARY]が障壁となっているからである。

一方、(10a)の文は(12)のような概念構造をもつと想定する：

(12)

きるのか？これは次のような説明が可能と思われる。すなわち，(10f)の場合，(12)の[a TO LEAVE]という Event 構造中の a の位置が任意コントロールの∅である。すなわち，[PROMISE_{[Event ∅ TO BE ALLOWED TO LEAVE]]]のような構造である。⁵そしてさらに，Larson (1991)が指摘する，与格動詞がもつ entailment も(19f)の成立に関与していると思われる。すなわち，(13a)の文では(13b)の含意が可能である：}

- (13) a. John promised Mary a sport car.
b. Mary gets a sport car.

同様に，(10f)の場合は，(14)のような entailment が成り立つはずである：

- (14) Mary gets a promise to be allowed to leave.

(14)の文が伝えている意味は，(12)の構造で，まさに GO-関数構造が表わしている意味である。さらにこのような分析を支持するものとしては，Farkas (1988) が指摘する事実がある。それは，動詞 *promise* のすべての受身補部が目的語 object control を許すわけではないということである：

- (15) a. #John promised Mary to be kissed by Felix.
b. #Max promised Mary to be rumored to be leaving.

4.5 結び

force と *promise* の to-不定詞句の義務的コントロールに関する上記のような分析が妥当なものであるとすれば，それは統語表示と意味表示のコントロールの関係にどのような示唆をもつのだろうか。いわゆる統語上のコントロールと見なされるものは，不定詞や動名詞などを含む非定形節が「意味上の主語」をとる場合に限定されるので，上記のような分析がそれらのすべての非定形節の義務的コントロールに適用されるとするならば，統語上の義務的コントロール

現象は、意味表示上の義務的コントロール現象の一部を成すにすぎない、ということではないだろうか。しかしながら、それを明示的な形で示すためには、広範囲な非定形節のコントロール現象を対象にそれを実証して行くことと、概念構造でのコントロール理論の精緻化が必要なことは、言うまでもない。

第5章：随意的コントロールと中間構文*

5.1 はじめに

(1) に見られるような中間構文においては、その文法上の主語は他動詞の論理的な目的語に対応する項であるのに対し、他動詞の論理的な主語に相当する項は明示的な実現形をもたない。それゆえに、中間構文は、意味表示と統語表示の関係を探る上で、非常に興味深いといえる。

- (1) a. Chickens kill easily.
b. Bureaucrats bribe easily.
c. Greek translates easily.
d. The baggage transports efficiently.

(Keyser and Roeper (1984: 381-3))

この論理的な主語、目的語と文法的な主語、目的語との相互関係を説明するために、二つの種類の統語的分析が提案されてきている。一つは、他動詞の主語が何らかの方法で抑制され、統語論において他動詞の目的語を派生的な主語とする NP-移動が行われたと仮定することによって、説明している。たとえば、(1a) の文は (2a) のような D 構造から (2b) のような S 構造へ NP-移動が行われたとする：

- (2) a. [NP \bar{S}] kill [NP chickens] easily (D 構造)
b. [NP chickens]_i kill [NP \bar{S}]_i easily (S 構造)

したがって、この NP-移動は受動文の派生の場合と同じ仕組みということになる。

もう一つの種類の分析は、「語彙的アプローチ」と呼ばれているもので、論理的な目的語が中間構文の D-structure の主語になる語彙規則の存在を仮定する

ことによって、説明している。たとえば、Fagan (1988) においては (3) のような2つの語彙規則を提案している：

(3) a. Assign *arb* to the external θ -role.

b. Externalize the direct θ -role.

(3a) の規則は動詞の外項に総称的解釈 *arb* (arbitrary interpretation) を与える規則であり、(3b) の規則は動詞の直接的 θ 役割を「外項化」する規則である。

前者の立場からの分析は、Keyser and Roeper (1984), Stroik (1992, 1995), Nakamura (1997) らによって提案され、後者の立場からの分析は、Fagan (1988, 1992), Roberts (1985, 1987), Ackema and Schoolemmer (1994, 1995), Zribi-Hertz (1993) らによって提案されている。

本章においては、英語の中間構文の「使役連鎖」モデルによる分析を提案する。このモデルにおいては、中間構文の論理的な主語は、概念構造における随意的コントロールを行う空範疇 'Ø' として表わされる。この分析により、中間構文の論理的な目的語が文法的主語になる事実と同様に、他動詞の主語の抑制、中間構文の総称性や状態性を説明することを可能にする。さらに、この分析は、今日に至るまで説明されていない中間構文と擬似中間構文との関係、また、概念構造における空範疇と統語構造における空範疇との関係にも、新たな光をあてることになるだろう。統語的には、この分析は NP 移動を支持するものとなる。

これ以降の本章の第2節以降の構成は以下の通り。第2節では中間動詞を特徴づける特性とはどのようなものであるかを述べる。第3節では本研究が採用している「使役連鎖」モデルでの中間構文の分析を提示する。第4節では、その分析と関連する擬似中間構文などとの関係を明らかにし、「使役の連鎖モデル」に基づく本分析の妥当性を検証する。第5節では、中間構文の状態性はどこから来るのかという問題にあてられている。最後に、第6節では、中間構文

と関連構文に関する本研究が、意味論と統語論の写像関係にどのような射程を持つか、また、 \emptyset と PRO_{arb} との関係はどのようなものであるか議論する。

5.2 中間構文の特性

中間構文においては論理的な目的語が文法的な主語となるという事実のほか、重要な特性の一つとしてまず挙げられるは、出来事ではなく状態を表わすということである。従って、Keyser and Roeper (1984) において言及されているように、命令文や進行形の構文、また、知覚動詞の後の小節には起こりえない：

- (4) a. *Wax, floor!
- b. *Translate, Greek!
- c. *Kill, chicken!
- (5) a. *Chickens are killing.
- b. *Bureacrats are bribing.
- c. *The walls are painting.

(Keyser and Roeper (1984: 384-5))

- (6) a. *I saw bureaucrats bribe easily.
- b. *I saw the floor wax easily.
- c. *I saw chickens kill easily.

状態性とともにもう一つの重要な特性は、その総称性 (genericity) である。すなわち、それらは広く真であることが成り立つ命題を述べている。従って、次の (7) の文がいずれも容認度が低いことからわかるように、特定時の出来事を記述してはいない：

- (7) a. ?Yesterday, the mayor bribed easily, according to the

newspaper.

b. ?At yesterday's house party, the kitchen wall painted easily.

c. ?Grandpa went out to kill a chicken for dinner, but the chicken
he selected didn't kill easily.

d. ?If it hadn't been for the wet weather, my kitchen floor would
have waxed easily.

(Keyser and Roeper (1984: 384))

三番目の特性は、中間構文には潜在的な動作主が存在することである。このことは、目的を表わす付加詞との共起が可能なことから、確かめられる¹：

(8) Our dog food cuts like meat to be fed conveniently to your pet.

(*Kenkyusha's Dictionary of Theoretical Linguistics*, p. 304)

しかしながら、すべての中間動詞が潜在的動作主をとるわけではないことは、通常動作主ではなく原因 (Cause) を主語に取る感情動詞も中間構文になりうることから確かめられる：

(9) a. George frightens easily.

b. Chickens scare easily.

(Ackema and Schoorlemmer (1994: 383))

注目に値する四番目の特性は、中間構文は一般的に何らかの修飾語句を要するということである。これには、付加詞、イントネーションの焦点、否定、法助動詞などが含まれる。それぞれ(8)の各文により例示される：

(10) a. The coats wash *(with no trouble).

b. The lightweights *(don't) knock out.

c. The floors *(won't) clean.

(*Kenkyusha's Dictionary of Theoretical Linguistics*, p. 304)

d. I thought we were out of gas, but the car DRIVES.

(Kageyama (2001: 203))

しかしながら、上の4つの特性を満たす他動詞でも中間構文としては、不適格な動詞がある。最も一般性のある制約の一つは、被動性条件 (Affectedness Condition: AC) である。すなわち、中間構文の主語になる項は、「主題 (Theme)」, 本稿が採用しているモデルにおいては GO-関数の最初の項でなければならない。たとえば、接触・打撃動詞の *hit* は、(4-3) のような概念構造表示を想定しているが、GO-関数の最初の項は、‘ α ’ という空範疇であるので、[FENCE] が内項となり最終的には目的語に投射されるが、この動詞の場合、中間構文をもたない：

(13) a. *This kind of metal hits easily.

b. *This kind of metal hits flat easily.

(Kageyama (2001: 201))

他の接触・打撃の意味を伴う動詞、*stroke, strike, pound, touch* などについても同様のことが言える：

(14) a. *That dog strokes easily.

b. ?That iron strikes easily.

c. ?This kind of metal pounds easily.

(Kageyama (2001: 201))

d. *That kind of metal hammers easily.

e. ?That kind of cloth irons/presses well.

f. *That kind of person easily touches deeply.

g. *This table wipes easily.

(Kageyama (2001: 201))

i. *Flies swat easily.

j. *Naughty children spank easily.

k. *That cloth pokes easily.

(from i to k, Levin (1993: 150-154))

もう一つの一般性のある制約は、主語に当たる項が動作主であると同時に「主題 (Theme)」の着点 (Goal) である他動詞は、中間構文に成りにくい。よく知られているように、動詞 *sell* の中間構文は全く問題ないが、*buy* の中間構文は容認されない：

(15) a. This book sells well.

b. *This book buys well.

同様のことは、*obtain*, *borrow*, *get*, *acquire*, *learn* などについても当てはまる：

(16) a. *This kind of book obtains/gets easily.

b. *This kind of book borrows easily.

c. *That kind of profit gains easily.

d. *That kind of salary earns easily.

e. *French acquires easily.

(Fagan (1988: 258))

g. *German learns easily.

(Keyser & Roeper (1984: 383))

さらに興味深いことには、*rent/lease* のような動詞はその主語が起点である用法と着点である用法の両方が存在するが、中間構文で許されるのは、前者の場合のみである：

(17) This type of condominium rents/leases well.

この制約が何に起因するのかについては、今までのところ解答は得られていな

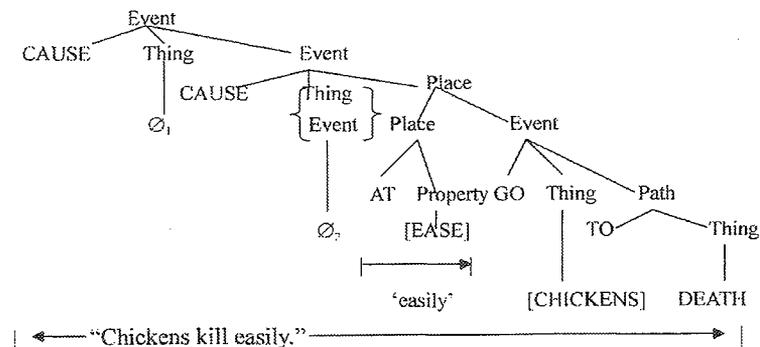
い。

5.3 中間構文の代替分析

5.3.1 概念構造表示に関して

さて、「使役の連鎖」モデルに基づく中間構文の代替分析として、まず、(1a) の文の概念構造表示として、(18) のような構造を提案したい。

(18)



(18) の図において二つの随意的空範疇 \emptyset が存在する。 \emptyset_1 は動作主の項が不特定であることを表わしている。 \emptyset_2 は道具/手段の項が不特定であることを表わしている。 \emptyset_1 によって、中間動詞が潜在的動作主をもつ総称文であることを表わしている。

次に簡易を表わす付加詞 *easily* の概念構造での表示について述べておきたい。まず、付加詞が場所関数[Place [Place [AT (EASE)]]]で表わされると考えるのは、*-ly* 付加詞の殆どが前置詞句との言いかえが可能なことによるものである。たとえば、*easily* の代わりに '*with great ease*' ということもできるからである。では、この場所関数は使役関数構造の中でどの位置にくるのだろうか? どのような理由から、(18) のような構造で二番目の CAUSE-関数の下、GO-関数の上

に位置しているといえるのであろうか？この点に関しては、動作主をとる様態の付加詞との相違をはっきりさせておく必要がある。*Carefully, willingly* などの様態の付加詞は、ある特定の状況における動作主の心的態度を表わすから、(2-5)の各文におけるように、他動詞ではあっても動作主を主語に取らない場合には、生じ得ない：

- (19) a. *The key carefully/willingly opened the door.
b. *A typhoon carefully/willingly hit Japan.
c. *Excessive drinking carefully/willingly injured his health.

また、非対格動詞とも共起しないことは言うまでもない：

- (20) a. *Accidents happen carefully/willingly.
b. *Some problems arise carefully/willingly.
c. *Chickens die carefully/willingly.

したがって、様態の付加詞が二番目の CAUSE-関数または GO-関数構造の中に起こりうることは、考えにくいことである。一方、*easily* のような付加詞は、そうではない。Massam (1992) の指摘は、この点において非常に示唆的である。それは、外項をとる動詞だけがこの種の付加詞をとるだけではなく、内項しか取らない非対格動詞もこの種の付加詞を許容するというものである。次の(21)の a-d は非対格動詞の例であり、e-f は外項を取る動詞の例である。

- (21) a. Accidents happen easily.
b. This sort of glass breaks easily.
c. Some problems arise easily.
d. Royalists die well under torture.
e. Some players hi home runs easily.
f. Happy children learn well.

(Massam (1992: 120))²

また、外項を取るが、動作主を主語に取らない (19) に見られる動詞の場合であっても、*easily* のような付加詞との共起は何ら問題がない：

- (22) a. The key opened the door easily.
b. Excessive drinking injured his health easily.

以上の点から、この種の付加詞は、GO-関数構造を統御する位置にあるのが、最も適当であると考えられる。

5.3.2 概念構造表示から統語構造表示へ

概念構造表示から統語構造表示への連結に関して、先行研究の「統語的アプローチ」と「語彙的アプローチ」にならば、次のような二つの仮説を立てて考えてみたい。

- (23) 仮説 1 : 二つの CAUSE-関数内の \emptyset は、音形をもたないので、どちらも統語構造 (項構造及び D-構造) に連結されない。代わって GO-関数内の変項 [CHICKENS] が外項化される。

- (24) 仮説 2 : 最上位の CAUSE-関数内の \emptyset は、 PRO_{arb} として項構造の外項の位置に、変項 [CHICKENS] は(2-21) の Directed Change Linking Rule により内項の位置に連結される。

したがって、仮説 1 に従った (18) の項構造は (25a)、仮説 2 に従った (18) の項構造は (25b) である：

- (25) a. (chickens, < >)
b. (PRO_{arb} , <chickens>)

本研究は仮説 2 を支持するものであるが、それは以下のような論拠によるものである。それは、Stroik (1992, 1995) が中間構文の分析において、外項が存

在するとして提示している証拠とうまく適合するからである。Stroik (1992) は、中間動詞の外項である動作主の θ -役割は、 PRO_{arb} が割り当てられ、それは Larson (1988) の “Principle of Argument Demotion” に従って、構造的には VP-付加詞として実現している、としている。したがって、次の (26a) の文は、D-構造では (26b) のように表示される：

- (26) a. Bureaucrats bribe easily.
 b. [IP e [I' I [VP[VP bribe bureaucrats easily] PRO]]

そしてさらに、動作主の θ -役割の付加詞への降格は、必然的に内項である Theme の外項化を引き起こすとしている。したがって、(27) のような S-構造を得る。

- (27) [IP bureaucrats [I' I [VP[VP bribe easily] PRO]]]

彼は、外項 θ -役割が中間動詞において存在することを示唆する二つの証拠を提示している。おのおののタイプは、(23), (24) で例示される：

- (28) a. Books about oneself never read poorly.
 b. *Books about herself never read poorly.
 (29) a. Books about herself read quickly for Mary.
 b. *Books about oneself read quickly for Mary.

彼は、(28a), (29a) の文に、それぞれ、(30a), (30b) の D-構造を立てている：

- (30) a. [IP e [I' I [VP[VP never read books about oneself poorly] PRO]]]
 b. [IP e [I' I [VP[VP read books about herself] for Mary]]]

Belletti and Rizzi's (1988) の照応形はあらゆる統語的レベルで束縛されなければならないという説と関連して、Stroik (1992) は次のように論じている。もし、語彙的派生のように、Theme の項が D-構造で主語の位置に生成されていたとすれば、(28a), (29a) の文は先行詞をもたないことになってしまう、なぜ

なら、統語構造には照応形を c-command しようような高い位置にどんな NP も存在し得ないからである。他方、(30) における PRO と *Mary* は確実に照応形を c-command している。Nakamura (1997: 127) はまた、同じ議論が次のような *tough*-構文にも適用されると論じている：

(31) a. Books about oneself are easy to read.

b. *Books about himself are easy to read.

(32) a. *Books about oneself are easy to read for John.

b. Books about himself are easy to read for John.

これらの文の D-構造は次のように表示される：

(33) a. [IP e [I' I [AP[AP easy to read books about oneself poorly] PRO]]]

b. [IP e [I' I [AP[AP easy to read books about himself] for John]]]

これらの構造は、(30) のそれと並行している。このことは、照応的束縛が移動分析のもとでうまく説明できることを示唆している。

Stroik (1992) に対して、Zribi-Hertz (1993) と Ackema and Schoorlemmer (1995) は、(28a) のような照応形は Stroik (1995) の再帰形の議論で想定されているような通常のものではなく、(34) に見られるような、(Condition A によって) 統語的に認可されなければならない、ロゴ的 (logophoric) な照応形であるので、(28a) は NP-移動の証拠とはならないと、論じている：

(34) Books about oneself are often worrisome.

しかしながら、Nakamura (1997) によって指摘されているように、ロゴ的な分析は、*for*-句の NP が照応形の先行詞である (30) と (33) に見られる対比を説明することはできていない。

さて、上記のように、仮説 2 にのっとる分析を採用すると、概念構造から項

構造への結び付け規則である(2-20) は以下のように、修正されることになる：

(2-20') Outermost Cause Linking Rule

The first argument of the outermost CAUSE-function is linked to the external argument of the verb. If it is \emptyset , it is realized as PRO_{arb} .

また、項構造から D-構造への写像規則は、以下の (30) のように改められよう。ここでは、外項の写像の場合、変項である時と PRO_{arb} である場合が区別されることになる：

(35) 項構造から D 構造へのむすびつけ写像規則 (修正版)

- a. 内項は動詞に統率された位置に投射される。
- b. i. 外項が変項である場合は、動詞の指定部位置に投射される。
ii. 外項が PRO_{arb} である場合は、VP-adjunct に降格する。

また、内項の外項化に関しても補足しておくとして、(13), (14) に見られる接触・打撃動詞が中間構文になりえないという事実を考慮する時、外項化される内項は「主題 (Theme)」の場合に限定されるということが言えよう。

5.4 関連構文の分析

本節では、まず、(9) のような通常原因 (Cause) を主語に取る感情動詞の中間構文の分析を提示し、その後、(36) のような道具を主語に中間構文、(37) のような擬似中間構文を取りあげ、5.3 節での分析との関係を明らかにする。

(36) This knife cuts well.

(37) This knife spreads butter on the bread easily.

そして最後に、場所格交替動詞を取り上げ、この種の動詞の場合、(38) に見られるように locative variant は中間構文を許すが、with variant は許さないが、

それはなぜかを明示的に説明する。

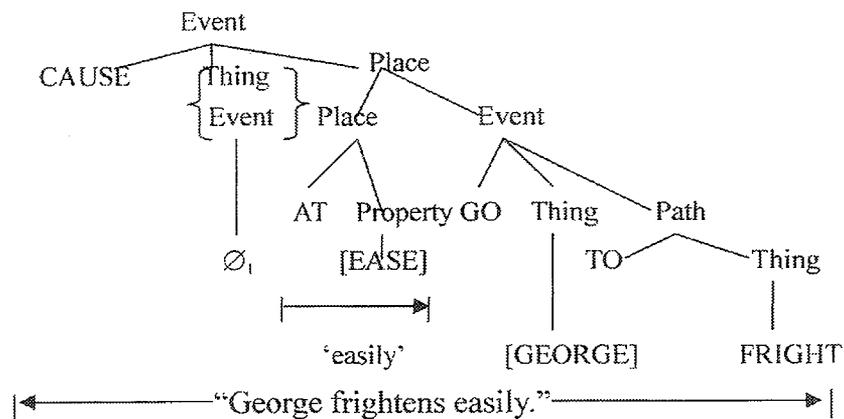
- (38) a. This paint sprays on the wall easily. (locative variant)
 b. *This wall sprays with paint easily. (with variant)

5.4.1 感情動詞の中間構文

(9) のような感情動詞は 2.2 節で明らかにしたように、一重の CAUSE-関数をとると考えられるので、(9) の文は、(39b) のように概念構造表示されると想定する：

- (39) a. George frightens easily. (=9)

b.



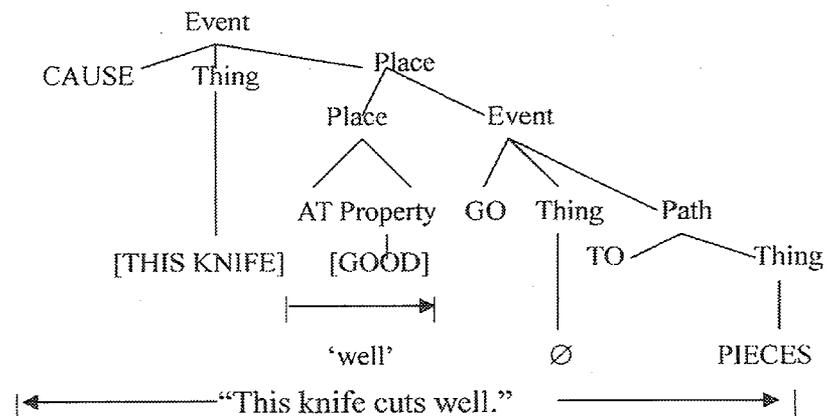
(39b) の構造から S-構造への派生は以下の通りである。この構造において、最も外側にある CAUSE-関数の最初の項 \emptyset は、(2-20') により PRO_{arb} として外項に結び付く。そして、D-構造への写像は、 PRO_{arb} が (35bii) により VP-Adjunct の位置に、[GEORGE] が動詞に統率される位置に投射される。しかしながら、本来動詞の指定部位置に投射されるべき外項の VP-Adjunct 位置

への降格により、いったん動詞の目的語位置に投射された [GEORGE] の外項化が引き起こされる。

5.4.2 道具の項を主語にとる中間構文

(36) のような道具の項を主語にとる中間構文の概念構造表示は、(40) のようであると想定する：

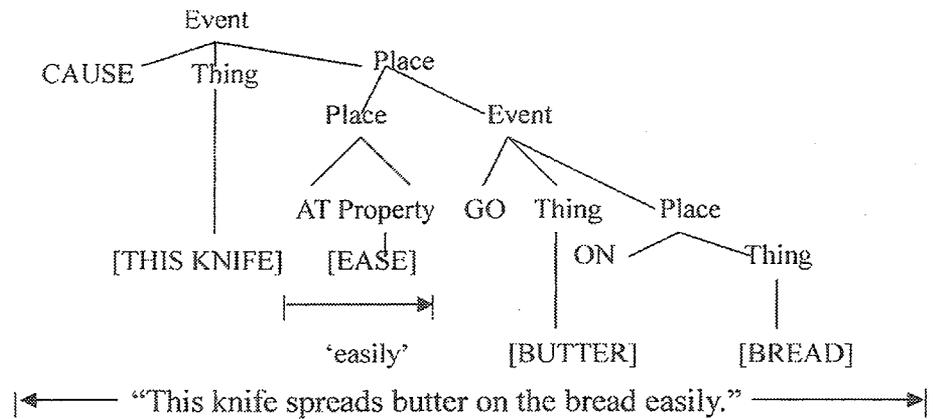
(40)



(40) の構造から S-構造への派生は以下の通りである。最も外側にある CAUSE-関数の最初の項 [THIS KNIFE] は (2-20') により外項に結び付く。GO-関数の最初の項は ∅ なので内項には結び付かない。次に内項に結び付くはずの 'PIECES' は定項なので最終的には、cut という語彙項目に包入されてしまうので、やはり内項とは結び付かない。従って、擬似中間構文からは通常の中間構文の派生に見られるような、内項の外項化は行なわれないことになる。

では、(37) のような道具の項を主語にとる他動詞文の場合は、どうであろうか？(37) の文は (41) のような概念構造表示をとると想定する：

(41)



(41) から S-構造への派生は、通常他動詞文の場合と同様である。最も外側にある CAUSE-関数の最初の項 [THIS KNIFE] は (2-20') により外項に結び付く。そして、GO-関数の最初の項である [BUTTER] は (2-21) の規則により内項に結び付く。

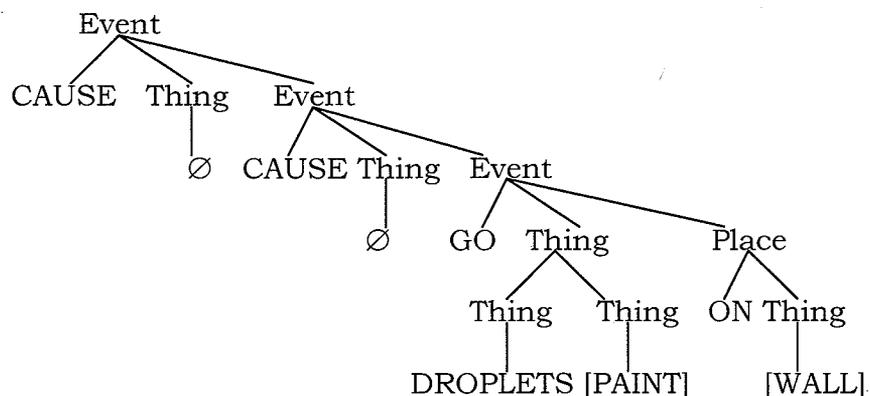
(37) のような文の概念構造は単一の CAUSE-関数ではなく、(18) におけるように二重の CAUSE-関数の構造ではないかとの疑問もここで起きるかもしれない。しかしながら、この説は、(28a), (29a) とは対照的に (42) の文が成り立たないことから、退けられる：

(42) *This knife spreads ointment on oneself easily.

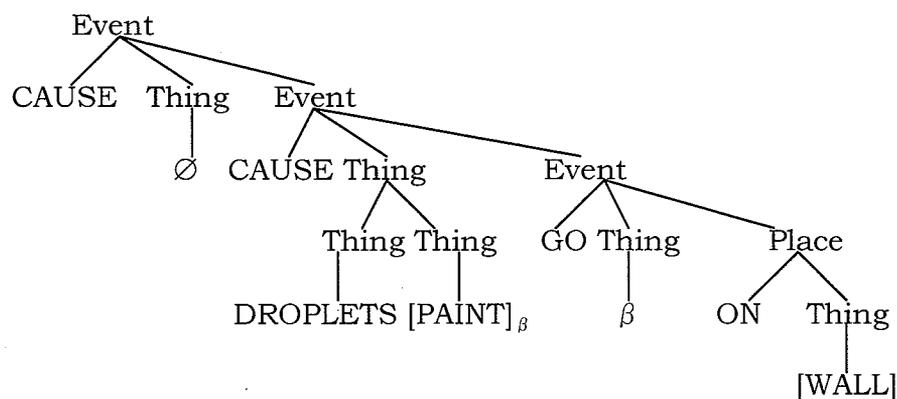
5.4.3 場所格交替動詞の中間構文

では、本節ではなぜ (38) に見られるような場所格交替動詞の locative variant は中間構文を許すのに対して、with variant は許さないのか検討してみよう。(1-3) において他動詞 *spray* の両者の概念構造を示した。それにとると(38a, b) の概念構造表示は、以下のようなになる：

(43) a.



b.



上記の a, b の構造上の相違から、もはやなぜ a の locative variant の中間構文が成り立ち、b の *with variant* が成り立たないかは自明である。すなわち、前者の場合には、(18) の構造と同じように、「主題」は [PAINT] であるのに対して、後者の場合には、[PAINT] は二番目の CAUSE-関数の項であって、「主題」は β という空範疇でしかないからである。従って、前者の [PAINT] は NP-移動を受けるのに対し、後者の [PAINT] は NP-移動を受けない。言い換えれば、b は、接触・打撃動詞の場合と同様に、中間構文の被動性条件に反することになるのである。

上記3節にわたる構文の分析は、本プロジェクトにおけるような空範疇を用いた概念構造表示に基づくならば、各関連構文と中間構文との異同、各関連構文同士の相違を的確に捉えることができる。

5.5 中間構文の状態性はどこからくるか？

では、第5章の最後に、中間構文の状態性はどこからくるのかという問題を検討してみたい。この点に関して、筆者が最も妥当な説明であると考えてるのは、Roberts (1986) によるものである。それによれば、中間動詞が状態化するのは、INFL と V の同一指標付与 (coindexing) が行われなかったことに起因している。すなわち、一般的に V は随意的に Infl と (より正確には、Infl 中の Tense の構成素と) 同一指標を与えられる。そして次のような提案をしている：

- (44) a. A verb which is temporally dependent on Tense has an event reading.
b. A verb which is not temporally dependent on Tense has a state reading.

(Roberts (1986: 198))

ここでの ‘temporally dependent’ とは、次のように定義されている：

- (45) X is temporally dependent on Y iff Y governs and is coindexed with X and there is no Z such that Z governs X and is coindexed with X but does not govern Y.

(Ibid.)

すなわち、動詞が一時的に Tense に依存するならば、Event としての読みを

もち、依存しないならば、State としての読みをもつということである。そして、このようなアスペクト的な解釈は、 θ -役割付与によって決まってくると述べている：

(46) Aspectual interpretation is a function of θ -role assignment in that indices of structural θ -role assignment are relevant for (44).

(Ibid.)

従って、中間動詞が状態化するのは、Agent という θ -役割をもつ動詞がこの θ -役割を付与することができなかつたので、アスペクトとして「状態」と解釈されたということになる。同様のことは、(36), (37) などの擬似的中間構文に関してもあてはまると考えられる。

5.6 結び

上記のような、 \emptyset の空範疇を概念構造表示に取り入れ、さらにそれが統語表示で PRO_{arb} に連結するとする中間構文の分析によるならば、中間構文のもつ殆どの特性、とりわけ、その総称性、状態性、潜在的な動作主をもつこと、被動性制約を説明することができる。また、これらの特性の説明のみならず、関連構文である、動作主を主語に取らない感情動詞の中間構文、道具の項を主語とする擬似的な中間構文との異同、場所格交替動詞の中間構文化などについても、的確に説明が可能となる。そして、理論上より重要なのは、前章の義務的コントロールの場合と同様、これまでの中間構文に関する分析が妥当なものであるならば、統語表示上の PRO_{arb} は意味表示上の空範疇 \emptyset の下位集合をなすに過ぎないということを強く示唆するものである。

しかしながら、残されているのは、まず第一に、被動性制約以外の他の制約

をどう説明するかである。とりわけ, (15), (16) のような *obtain* タイプの動詞の場合である。そのほか, 先行研究には次のようなものが挙げられている:

(47) *The formula memorizes easily.

(Zubizarreta (1987: 143))

(48) *This poem understands easily.

(Fellbaum and Zribi-Hertz (1989: 11))

(49) *The traffic jam avoids easily.

(Tenny (1994: 9))

(50) *Cities destroy easily.

(Levin (1993: 239))

もう一つは, 英語の再帰中間構文との比較や他の言語における中間構文に相当する構文との比較対照により, それぞれの構文の性質をより明確にすることである。そのようないくつかの言語の構文間の比較対照研究を行なうならば, 英語の中間構文のどこまでが普遍的なものであり, どこまでが個別的なものであるかを明らかにすることができるであろう。

第6章：結 論

「概念構造における空範疇に関する研究」という本研究課題のもと、3章、4章、5章にわたって、Inoue (2001a, b) 以来、課題代表者が提案してきた概念構造における二つの空範疇、(i) $\alpha, \beta, \gamma \dots$, (ii) \emptyset , についての考察を進めてきた。考察は、二つの方向から行われた。一つの方向は、この二つの空範疇を用いて、語彙項目及び構文がどのように概念構造表示されそれが統語構造にどう結びつくかを明らかにし、またそれにより得られた結果は先行研究よりどのような点で優っているかを示すものである。もう一つの方向は、この二つの空範疇の性質そのものがどのようなものであるか明らかにするとともに、統語的な空範疇とのかかわりを考察するものである。前者の方向は、いわば事例研究であり、後者の方向は理論面の研究である。

前者の方向での事例研究は、3章で非能格自動詞の一種である英語の音声放出動詞を取り上げ、4章では *force* や *promise* などの *to*-不定詞を取る動詞構文を扱い、第5章では英語の中間構文を考察の対象とした。

第3章においては、音声放出動詞の概念構造に二種類の空範疇を用いた表示を提案し、それを支持する論拠を示した。この考察の結論としていえることは、二つの空範疇を立てるならば「行為」も「使役」の一種として扱うことができることである。その結果として、主語が動作主である場合とそうでない場合の相違、この種の動詞が任意的に伴う *Source* や *Goal* を示す表現との共起、単一の音声表出動詞の構文とそれに対応する同属目的語構文との関係および *give a V* 構文との関係が、的確に説明されることになる。先行研究におけるように、ACT あるいは DO といった一項の関数を立てる分析では、上記のような事柄はそのままでは説明しえず、述語の合成といったアド・ホックな手段に頼らざ

るを得ない。

第4章においては、統語上義務的コントロール動詞と言われている *force* や *promise* などの *to*-不定詞を取る動詞構文が、(i) のタイプの空範疇をもちいてどのように概念構造表示され、統語構造と連結するかを議論している。その考察の結果言えることは、従来統語構造で扱われてきた、**subject control** 及び **object control** 現象は (i) のタイプの空範疇で的確に説明できるということである。

第5章は (ii) のタイプの空範疇を用いた中間構文の概念構造表示を提案し、その概念構造表示がどのように統語構造表示に結びつくかを議論している。結論としては、このような分析によるならば、中間構文の特性や統語構造への写像が適切に捉えられるばかりでなく、擬似的中間構文など関連構文との関係、中間構文の状態性などについても適切な説明が与えられることになる。

もう一方の理論面の研究は、3.3 節、4章、5章で取り上げた。まず、3.3 節では、(i) および (ii) の空範疇はどのような性格をもつものかを統語的空範疇との対比させながら、考察した。結論としては、素性構成としては、(i) のタイプは [+anaphor, +pronominal] であり、(ii) のタイプは [+pronominal] である。また、統語上の四つの空範疇の中で PRO 以外の空範疇は特定の音声内容をもつ名詞句と対応関係にあるが、名詞句に相当するカテゴリーは概念構造にはないので、二つの空範疇のどちらも最も近いのは PRO である。したがって、(i) は PRO_{obl} に、(ii) は PRO_{arb} に相当するものであるとの結論に達した。しかしながら、その生起する位置は統語上の PRO が統率されない主語の位置のみであるのに対して、概念構造上の二つの空範疇は主語になりうる項以外の位置にも生起する、という点で異なっている。

第4章では (i) の空範疇に関して、次の4つの問題を考察した：(i) コントロー

ラーとなる意味要素はどのような種類のものか?; (ii) コントロールされる要素はどのようなもので、コントローラーとどのような関係にあるのか?; (iii) 一つのコントローラーがコントロールする要素は一つのみか、あるいは複数の要素が許容されるのか?; (iv) 統語表示における PRO_{obl} は、意味表示における α に対応するの か? 考察の結果としては、主語になりうる項以外の位置にも生じた $\alpha, \beta, \gamma \dots$ といった空範疇は語彙化の過程のみに関わっていて統語構造に投射されることはないので、統語表示上の義務的コントロール現象は意味表示上の義務的コントロール現象の下位集合を成すというものである。

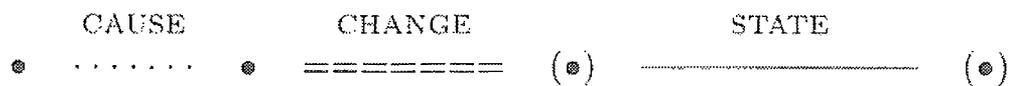
第5章に (ii) に関してこの空範疇が統語上の PRO_{arb} に連結される分析を通して、やはり統語表示上の随意的コントロール現象は意味表示上の随意的コントロール現象の下位集合を成すのではないかとの仮説に至っている。

しかしながら、これらの考察結果は英語以外の言語を含めた、さらに多くの語彙項目や関連構文で検証していく必要があることは、言うまでもないことである。

注

第2章

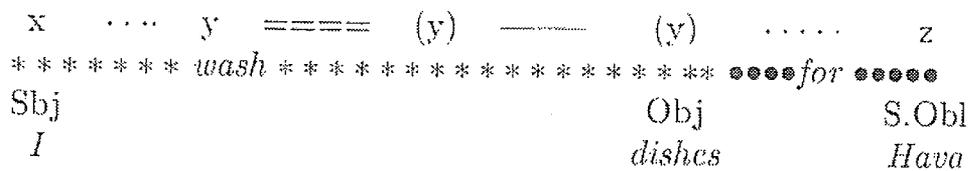
1) Croft (1998) においては, (3) のような矢印を用いた表記法を改訂し, CAUSE, CHANGE, STATE を, それぞれ, 以下のように区別して表記している:



従って, (ia) のような文は, (ib) のように表示されている:

(i) a. I washed the dishes for Hava.

b.



しかしながら, この表記法の変化は, 筆者の (4) の構造になんら影響を及ぼすものではないと考える。なぜなら, ここで筆者が導入しているのは, Instrument/Means が Agent と Theme の中間に位置するという Croft の考え方だからである。

2) 井上 (2001, 2004) 等においては, Manner も中間的な使役の鎖の一つをなすとの説を採っていたが, Manner は Event に付随するものではあるがそれを引き起こすものではないという理由から, 本報告書ではそれを改めている。

3) しかしながら, 一重の CAUSE-関数の最初の項が外項に結びつくかは, 言語により変異のあるところである。日本語のように「道具」の項が主語になりえ

ない言語にあつては (e.g. *鍵がドアをあけた), 二重の CAUSE-関数の最初の項のみが外項に結びつく。

第3章

*この章は, 井上 (2004) の一部に修正を加えたものである。

1) このことは, すべての非能格動詞から *-able* を用いた語形成ができるという意味ではない。大半の無意識的な音声放出動詞には当てはまらない:
*sighable, *sneezable, *coughable, *snortable, *hiccupable, etc.

2) ちなみに, *from within* という句との共起は, 光の放出動詞にも当てはまる。
次のような例があげられる:

- (i) a. Love lit her *from within* ...
- b. A cinema organ is like a big jelly mould, illuminated *from within* ...

(from British National Corpus)

3) この種の含意は, 光の放出動詞にも同様にあてはまる:

- (i) a. The rocket streaked into the sky.
- b. Fireflies flickered across the river.

4) ちなみに, 同属目的語をとる構文とそれに対応する単一動詞の構文は, 以下に見られるように, 後者が時間的に限定されない読み (*delimited reading*) をもつという点において異なっている:

- (i) a. Mary laughed (for an hour/*in an hour).
- b. Martha sang (for an hour/*in an hour).
- c. Mary sneezed (for a minute /*in a minute).
- (ii) a. Mary laughed a mirthless laugh (in one minute/for one

- minute).
- b. Martha sang a joyful song (in five minutes/for five minutes).
- c. Mary sneezed a horrific sneeze (in one minute/for one minute).

(Tenny (1994: 39))

しかしながら、この同属目的語にかかる有界性 (telicity) 条件は、殆どの他動詞の目的語の項に当てはまるものである。したがって、このことはここでの主張に対する反論とはなりえない。

第4章

*この章は、井上 (2005) に加筆修正を行なったものである。

- 1) これ以降、前の章の番号に言及する時は、(1-3b) のように記す。
- 2) 語彙の内部構造に包入されてしまっている定項が照応機能をもたないことを示す間接的な証拠は、影山(1993:11)が指摘する次の複合語の事実に求められるであろう。たとえば、複合語「金魚すくい」や「京都旅行」や「親子げんか」には、定項[KINGYO]や[KYOTO]や[OYAKO]が含まれていると考えられるが、その部分のみを代名詞で置き換えることはできない:

- (ii) a. *それすくい
 b. *そこ旅行
 c. *かれらげんか

3) (11)におけるように、*force* の *to*-不定詞が Path-関数で表わせると考えるのは、多くの *force* タイプの動詞が取る *to*-不定詞が、*where* を使った疑問文の答えとなりうる、と言った前置詞の *to* と不定詞の *to* との意味的同一性を示す事実

が挙げられる:

(i) Where did that direct him?

It directed him to make a new discovery.

(ii) Where did his sense of being guilty drive him?

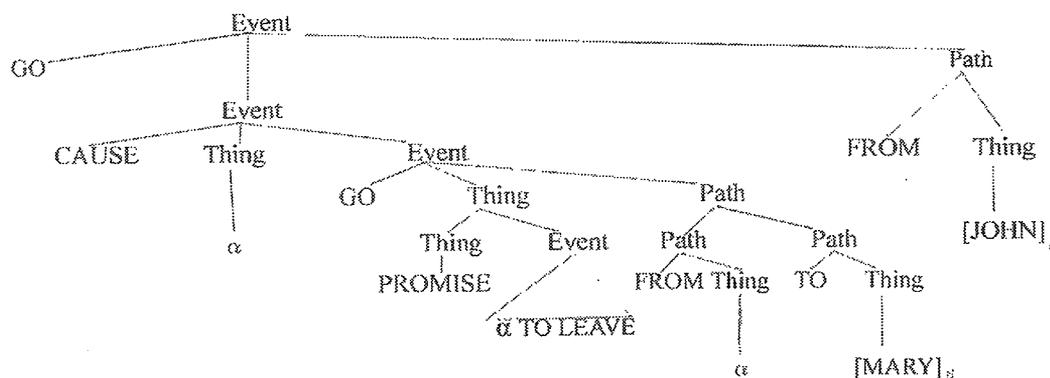
It drove him to confess what he did.

(iii) Where did the fact lead him?

It led him to conclude that that linguistic theory is wrong.

4) たとえ, [JOHN]の項が *by*-phrase で表わされたとしても, 容認度に変わりはないと思われる。受身文の概念構造を以下のように, 対応する能動文の概念構造を GO 関数の最初の項にもつ構造であると想定する:

(i)



(なお, ここで *by*-phrase が FROM 関数で表わされると考えるのは, 多くの言語において, これが起源を表わす前置詞句等で表わされることによるものである(e.g. 日本語 *カラ*; 独語 *von*; OE *fram*)) (i)において, [α TO LEAVE]の α を, c-command している最短の項は, CAUSE 関数中の最初の項であるが, これもやはりコントロールされている項であって, 変項ではないからである。

5) このことを示しているのは, 以下のような *it* を用いた受身文の存在である:

(i) It was never promised to Mary [[to be allowed to leave]]

(Haegeman (1991:282))

第5章

*この章は、2006年12月9日広島言語文化談話会で口頭発表した「中間構文の意味論と統語論の結びつきについて」の草稿に加筆修正を行なったものである。

1) Kageyama (2001) においては、以下のような、道具を表わす付加詞, Keyser and Roeper (1984) においては、手段を表わす付加詞がついた中間構文も、潜在的動作主の存在を示すとしているが、筆者のインフォーマントではいずれも

* または ? が付くとの判断であった :

(i) a. This table polishes well with this cream.

b. The meat cuts easily with a knife.

(Kageyama (2001: 190-1))

(ii) Messages transmit rapidly by satellite.

(Keyser and Roeper (1984: 383))

2) しかしながら、彼女のもう一つの指摘である、簡易付加詞は文の末尾に生じるという説は、必ずしも正しくない。なぜなら、筆者のインフォーマントの判断では、以下のような主語の直後にくるような簡易付加詞も OK であるからである :

(i) a. John easily killed the chickens.

b. Accidents easily happen.

c. This sort of glass easily breaks.

参考文献

[Articles and Books]

- Ackema, Peter and Neele Schorlemmer (1994) "The Middle Construction and the Syntax-Semantics Interface," *Lingua* 93, 59-90.
- Ackema, Peter and Neele Schorlemmer (1995) "Middles and Nonmovement," *Linguistic Inquiry* 26, 173-197.
- Belletti, Adriana, and Luigi Rizzi (1988) "Psych-verbs and θ -theory," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 291-352.
- Carrier, Jill and Janet H. Randall (1992) "The Argument Structure and Syntactic Structures of Resultatives," *Linguistic Inquiry* 23, 173-234.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Croft, William (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations*, University of Chicago Press.
- Croft, William (1998) "Event Structure in Argument Linking," *The Projection of Arguments*, ed. by Butt, Miriam and Wilhelm Geuder, 21-63, CSLI Publications.
- Fagan, Sarah M.B. (1988) "The English Middle," *Linguistic Inquiry* 19, 181-203.
- Fagan, Sarah M.B. (1992) *The Syntax and Semantics of Middle Constructions*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Farkas, Donka F. (1988) "On Obligatory Control," *Linguistics and*

- Philosophy* 11, 27-58.
- Fellbaum and Zribi-Hertz (1989) *The Middle Construction in French and English: A Comparative Study of its Syntax and Semantics*, Indiana University Linguistics Club, Indiana.
- Haegeman, Liliane (1991) *Introduction to Government and Binding Theory*, Basil Blackwell, Oxford.
- Hovav, Malka Rappaport and Beth Levin (1998) "Building Verb Meanings," *The Projection of Arguments*, ed. by Butt, Miriam and Wilhelm Geuder, 97-134, CSLI Publications.
- Huang, C.-T. James (1984) "On the Distribution and Reference of Empty Pronouns," *Linguistic Inquiry* 15, No.4, 531-574.
- Inoue, Kazuko (2001a) "Verb Meaning vs. Construction Meaning: The Cases of *Hit*, *Spray* and *Load*," (Review Article: *A Lexical Network Approach to Verbal Semantics*, by Seizi Iwata, Kaitakusha, Tokyo, 1998,) *English Linguistics* 18, No.2, 670-695.
- Inoue, Kazuko (2001b) *Misekake Mokutekigo Koubun ni okeru Tougoron to Imiron no Musubitsuki ni kansuru Kenkyu* (A Study on the Linking between the Syntax and Semantics of Fake Object Constructions) A Report on a Grant-in-Aid for Scientific Research from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.
- Inoue, Kazuko (2004) "An Exploration into Action: The Case of English Sound Emission Verbs," *Studies in Language and Culture* 30, 57-81.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 くろしお出版.
- 井上和子 (2005) 「意味表示と義務的コントロール」『言語文化研究』 31, 1-18.

- Kageyama, Taro ed. (1997) *Verb Semantics and Syntactic Structures*,
Kuroshio Publishers, Tokyo.
- Kageyama, Taro ed. (2001) *Nichiei Taisho – Doushino Imito Koubun –*
(Contrastive Studies between Japanese and English – Verb Meaning
and Construction –), Taishukan Shoten, Tokyo.
- Keyser, Samuel J., and Thomas Roeper (1984) “On the Middle and
Ergative Constructions in English,” *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.
- Koster, Jan (1984) “On Binding and Control,” *Linguistic Inquiry* 15, No.3,
417-459.
- Larson, Richard K. (1988) “On the Double Object Construction,”
Linguistic Inquiry 19, 181-203.
- Larson, Richard K. (1991) “*Promise and the Theory of Control*,” *Linguistic
Inquiry* 22, No.1, 103-139.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations*, The University
of Chicago Press, Chicago and London.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the
Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Manzini, Maria R. (1983) “On Control and Control Theory,” *Linguistic
Inquiry* 14, No.3, 421-446.
- Marantz, Alec (1984) *On the Nature of Grammatical Relations*, MIT Press,
Cambridge, MA.
- Massam, Diane (1992) “Null Objects and Non-thematic Subjects,”
Journal of Linguistics 28, 115-137
- Nakamura, Masaru (1997) “The Middle Construction and Semantic

- Passivization," *Verb Semantics and Syntactic Structure*, ed. by Taro Kageyama, 115-146, Kuroshio Publishers, Tokyo.
- Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Quirk, Randolph, Geoffrey Leech and Sidney Greenbaum (1985) *Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Roberts, Ian (1985) *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*, Ph.D. dissertation, University of Southern California, Los Angeles.
- Roberts, Ian (1987) *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*, Foris, Dordrecht.
- Rosenbaum, Peter S. (1970) "A Principle Governing Deletion in English Sentential Complementation," in R. Jacobs and P. Rosenbaum, eds., *Readings in English Transformational Grammar*, Ginn, Waltham, MA.
- Stroik, Thomas (1992) "Middles and Movement," *Linguistic Inquiry* 23, 127-137.
- Stroik, Thomas (1995) "On Middle Formation: A Reply to Zribi-Hertz," *Linguistic Inquiry* 26, 165-171.
- Tenny, Carol L. (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Vendler, Zeno (1967) (1967) "Verbs and Times," *Linguistics in Philosophy*, by Zeno Vendler, 1967, 97-121, Cornell University Press, Ithaca,

New York.

Zribi-Hertz, Anne (1993) "On Stroik's Analysis of English Middle Constructions," *Linguistic Inquiry* 24, 583-589.

Zubizarreta, Maria-Luiza (1987) *Levels of Representation in the Lexicon and in the Syntax*, Foris, Dordrecht.

[Dictionaries]

British National Corpus

Kenkyusha Dictionary of English Collocation (1995), ed. by Ichikawa, Shigejiro, Kenkyusha, Tokyo.

Kenkyusha's Dictionary of Theoretical Linguistics (1992), ed. by Haraguchi, Shosuke and Masaru Nakamura, Kenkyusha, Tokyo.